
刺身のつまにもなりやしねえ。

takao

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刺身のつまにもなりやしねえ。

【Nコード】

N2124D

【作者名】

takao

【あらすじ】

真面目ではないサラリーマン眼鏡青年と、無駄にカワイイ男子高校生が暮らす古いアパートに、変な方言を喋る妙な大根がやってきた！そのリーマン、隣の部屋のカワイイお姉さんにどうやら恋をしている模様で、大根は世話を焼こうとするが…。

ラブコメですが、ギャグあり、下ネタあり、ホームドラマあり、ファンタジーありともう何でもありのお話です。気楽にお楽しみいただけましたら幸いです。

6 畳1間(1)(前書き)

別の作品と、主人公たちの暮らすアパートや家庭環境の設定がかなり被っていることがあります。どうかご了承ください。

内容はギャグ&ファンタジー+時にシリアスといった、非常に漫画的なものです。

6 畳1間(1)

アブラナ荘と書かれたそれほど小汚くはない二階建ての築二十年のアパートにて。そこでのある晴れた春の日曜日のこと――。

午前六時三十分。休日の寝坊を満喫しようとしていた青年は耳元で聞こえる、ラジオ体操の大音量に頭の上まで布団を引き上げるが、それでも音は止まないどころか更に大きくなる上に彼の頭の上では何かがぼすっぼすつと跳ねている。

「やつかましいわ!!」

なんとか再び眠りにつこうと頑張ったものの無理だと即座に判断し、彼――聖護院しょうごいん波限なぎさという物々しい名の二十七歳のサラリーマンは、布団からがばつと起き上がる。と同時に、枕元にあった一昔前のラジカセを壊れるほどの力で叩いて止め、己を先程から蹴っていた物体を掴みあげる。

「暴力反対! 暴力反対! 自分よりも弱く小さく儂きものにそないな乱暴を働いたあ、どーゆー神経しとるんや!」

「ソレ」はそう言いながら彼の手からするりと器用にすり抜けて畳の上に降り立つと、ぶんぶん和白い「手足」を振り、音楽なしでラジオ体操を続けながら偉そうに言い放った。

「第一今日は記念すべき開墾の日やで! できれば畦立てと肥料蒔くまでやりたいなーって、前から言っとったやろーが! 日曜日だからっていい若いモンが朝寝坊しとるんやない!」

そう偉そうに胸(?)を張るのは白くずん胸の七十センチほどの体長に、頭には緑色の葉がわさわさと揺れ……四つに分かれた太い根が手足の役割をしている、不可解な生き物。――そう、謎の方言を使い、波限に変な訛りで偉そうに説教しているのは、信じられないことだが……、一本の大根、なのであった。

「何で、休みの日の朝からダイコンに説教されなきゃいけないーんだ

よ……」

波限はそう言いながら、再び布団にぼすりと倒れこんだ。

「休みつても昨日も休みやったやんけ！ 週休二日の地方公務員、休みの一日くらい朝から健全に体動かしたってバチはあたらんぜよ！」

最早どこの地方出身なのかわからないが、まるでオバサンのように説教を再び始めながら、その大根は尚も横になる男の背中をどどどとと元気に踏み始めた。

……あー、気持ちいいーかも……と、日頃のパソコンを使ったデスクワークで凝っている背中をほぐされ、ちよつと幸せな気分陥りそうな波限であつたが、やはりこうガミガミ言われては二度寝も出来ない。

そのうち何やらしい匂いがしてきたので、彼は観念して起き上がると同じく枕元に置いておいた眼鏡を掛けた。

「なぎささん、おはようー」

そう言つて匂いの元の方向から、身長が一六〇センチに届くか届かないかの可愛らしい顔をした男子高校生が、鍋を持って男を振り向いた。

「今朝はダイコンの味噌汁ですよー」

——今朝は、って今朝もだろーが……。

波限はそう突っ込みたくもなるが、弟でもない少年に毎日食事を準備してもらるのは有難いかと思ひ直した。

まだうだうだ言っている大根を完全に無視して、波限は布団をベランダに出すと、六畳一間の真ん中に部屋の隅に寄せていたちゃぶ台を置いた。そしてこれまたその男子高校生——宮重 みやしげ 青一郎 しょういちろう が玄関から持ってきたのであろう今日の新聞を、彼はＴシャツとジャージ姿のまま広げた。

「食べたら畑に行きましょうねー」

「ご飯や味噌汁を出されたちゃぶ台の上に運びながら、青一郎まで

もがにこにこと波限に宣告する。

ヤダね、と波限が言いかけ口を開いた瞬間、どーん！と大人しくなったかと思つた先程の大根が波限の背中に突っ込んできた。

「大根の神・清白様すずしろにこのイノチ貰うて、大根の精としてこの街にやつてきて行き倒れとつたところを、救ってくれたんがお前や！ワシがその恩返しとして聖護院にしてやれるんは、『一生分の大根に困らんようにしてやること』だけなんや！そのためにはまずは種を植えんことには始まらへんのやー！！（ちなみに春と秋の二回植えるでー）」

思い切り波限に体当たりするくるくせに、何故か折れないのが不思議な謎の大根。密かにその本体は大根じゃなくてロボットじゃねえか、と思ひながら波限は背中を擦って反論した。

「つても、結局労働力も肥料代もいるわけだし、オメーのやることつて種くれるだけじゃねえかよ……」

波限は喋る大根……何故か名前まであるらしく、本人は打木源助すけと名乗っているのだが……をじろりと睨みつけ、青一郎の差し出すご飯と味噌汁を受け取る。

早く出てつてくれねえかなと内心では思い、思わず大きなため息をつきながら波限は赤だしの味噌汁を啜ったが、その心の声が聞こえたのか、源助が早速反論してきた。

「なんやてー！？大根の精として、ヒトの恩に報いんといかんワシになんつーことを！ワシらの仲間やつて、古には大事に食べてくれる者に恩を返しとる。徒然草の第六十八段はワシらの世界では教本や！それをさせてくれへんなんて……ワ、ワシに死ねゆーんかー！」

とどこからか古典の本を取り出してはおいおいと泣き出す源助大根。

……死ぬなら不味そうだけど腹の足しになつてくれ、と心の中で突っ込みを入れながら（口に出すとうるさいから）、波限は黙って飯を食べ続けた。

本当に大根なのか？ 誰か操作してるんじゃないのか？と疑問に思うくらい、人間社会に詳しいこの大根なのであるが、一週間前の雨の日に波限がこの大根を拾ってしまったのが全ての始まりなのであった。男子高校生を養う安月給の地方公務員である彼は、これも節約だと食べるために拾って帰ったという顛末だったのだが、連れ帰って青一郎に渡し彼が湯で洗った途端、大根が喋りだすという大騒ぎとなったのであった。

しかし不安定な年頃であるはずの青一郎も、あっさりとこのおかしな現実を受け入れる。今も「あー。泣かしちゃったー」などと言いながら彼の茶碗を持って座り、源助大根の援護をする始末。

「それにおれもなぎささんも、おれらの家族も大根大好きなんだし。なぎささんが大根作ってくれたって言ったら、おれのかーちゃんも喜ぶと思いますよー」

波限が大根を好きかどうかは別として……まあ嫌いではないけれど……波限が、この大根を邪険に出来ない理由はそれなのである。奇しくもコイツが大根ではなく人参であつたならば、こんなにも葛藤はしなかったであろう、と彼は思う。

波限と青一郎は苗字は違うが遠い親戚で、この街から遠く離れた田舎の村で兄弟のように育ってきた。青一郎の家は母一人、子一人の母子家庭。まだ赤ん坊である青一郎を背負った彼の母親が、早くに両親を亡くした波限の面倒を看てくれたのであった。他人である自分の面倒を看てくれた彼女に、波限は非常に恩義を感じている。

大根はその田舎でもよく採れ、彼女も大好きであつた。よって大根を見れば、優しくしてくれた彼女のことや、彼女が作ってくれた大根料理をつい思い出してしまふ波限なのであった。

しかし数年前、彼女が病気で亡くなつてしまい、波限は自分の所為だと何処かですつと罪悪感を持っていた。流石あの優しく強かつた母親の子供と言ふべきか、青一郎は波限を恨んではないようであるが、せめて青一郎家族への恩返しとして、既に成人している自

分が彼を一人前にして社会に送り出してやらねば、と考え二人は一緒に暮らすことになったのであった。

というわけで住み慣れた田舎を離れ、波限の勤め先と青一郎の成績ならば入れる進学校に近いこのアパートを借り、六畳一間の部屋を二つ借りて波限の隣室に青一郎を住まわせているのである（一応青一郎もアルバイトをして家賃の足しにしている）。しかし食費や光熱費を少しでも浮かそうと、基本的に波限の部屋で風呂や台所などを共有しており、それにより掃除の手間も省けている。

二十代後半のしがない若手地方公務員の稼ぎなどたかが知れているので、慎ましかかな貧乏暮らしをしている二人は種だけでも大根がもらえるならば、継りたい気持ちなのであった。そのうえ青一郎の母親の好物であるならば、墓前に供えるのにも喜んでもらえるだろう。

しかも当人曰く、売っているものよりも栄養満点らしいので、それが本当ならば魅力的である……真偽のほどは定かではないが。

——そして波限がこの大根を追い出せないでいるのは、その理由ともうひとつ……。

「なんて、ええ話や〜」

いつのまに彼の回想を読み取っていたのか、源助はおいおいと泣いていた。

朝から鬱陶しいことこの上ないが、飯を朝から二杯ほどかきこんだ波限は、ごちそーさん、と言うと食器をその六畳間の隣にある小さな台所へと持っていった。

「よっしゃ！ 聖護院！ 食ったら行くでー！」

大根だから低血圧などないものか……朝から無駄にハイテンションな声が、波限の背中に降ってくる。同じく食べ終わった青一郎も行くつもりなのだろう、いそいそと鼻歌交じりに茶碗を片付けている。

「ヤダよ、俺は」

無駄だと思いつつ反論し、ニュースでも見ようかと部屋の方に戻ってテレビをつける波限に、案の定、源助は抱きついてうだうだと言いだした。

「そんな、種植えるだけやん！ そうしたら美味しい大根がとれるんやで？ 宮重のオカンも喜ぶんやろ？ ちよつとくらい体動かしてもええやんか、なあなあ。ワシも恩返し出来へんと、人間に大根の良さを普及し野菜不足の現代人に栄養補給してこいって、ワシに命を与えてくれはった清白様に顔向けできひんのやゝ！！」

遂には泣き落としとなり、波限の広い背中に追いつがつて源助はまたおいおいと泣き出した。

——役に立ちたいなら今すぐ俺の腹の足しになれ、と波限は言おうかと思つたが、これ以上うるさくされてもやはり困る。第一……。『わー』ったから静かにしろ！ 何が人の役に立ちたい、だ。朝っぱらからやかましく喚きやがつて……隣近所のことも考える！」

何かを考えながら背中の大根に一喝した波限に向かつて、茶碗を洗い終わり、台所でシンクを拭く青一郎の嬉しそうな声がした。

「お隣って、『はつか』さんのことですかー？」

「——」

6 畳1間(2)

藪蛇、とは当にこのことである。青一郎の指摘にぐつと押し黙ってしまつた波限に、源助大根のしてやったりという声が迎撃する。

「ほーかほーか。壁一枚向こうの佳人に遠慮して……そいつぁー悪かつた！ この色男！」

ばんばんと根で己の背中を叩き、嬉しそうに目を細め（目はないけれど傷がそういつた風に見える）、鬼の首を取つたように言う源助を波限はむんずと掴むと言葉も無く、余分なことを言つた青一郎の方へと投げつけた。

しかし慣れたものでそれを察知した青一郎はさつと身体を反転させ、源助は台所のシンクの下の扉にあえなく激突した。ぼとり、と下に落ちた後、頭を抑えてしくしくと泣く（だから目はないのだが）ふりをする源助は口を尖らせて（だから口は以下略）ぶーぶー言い始めた。

「なんや。よう声も掛けられんくせしよつて。このムツツリが。そんな情けないコトなら、ワシがいつそ言つてきたるか」

そして口に手をあて、隣の部屋に向かって何かを叫ぼうと大きな口を開けた（ように見えた）瞬間――、マツハのスピードで駆けつけた波限に口（であろう胴体の真ん中）を塞がれ、源助は今にも齧り付かれそうな勢いで持ち上げられた。

波限が大根に生で齧り付いてその息の根を止めるのが早いのか、隣に居るであろう女性に対して源助が何事か余分なことを叫ぶのが早いか――その一触即発となつたところを、「もー朝からハイテンションだなー、二人とも」と呑気に見ていた青一郎がその場を治めた。「とりあえず、畑に行きましょうよ」

……結局。この意思のある大根を切つたり食べたりすれば、きつと断末魔が響き渡りまるで殺人事件のような展開になりそうで、非

常に罪悪感をもってしまうことと、「そのこと」を嘘がつけない波限の性格からすぐにこの大根にまで知られてしまったことにより、手出しが出来ない。最後にはこの二人のペースに丸めこまれてしまふ波限は、春のうららかな朝、半袖Ｔシャツにジャージ、頭にはタオルを巻き、軍手をはめた見事な畑仕事ルックで、大根を肩に青一郎と部屋を出る羽目になった。

すると……。

なんとというグッドなのかバッドなのかわからないタイミングで、隣の部屋の扉もガチャリと開いた。

そこには特別美人というわけでもないが、落ち着いた優しい顔立ち、清楚な雰囲気、日本人らしい黒くさらさらなセミロングの髪を下で二つに分けて縛っている二十代前半と見られる若い女が、掃除でもするのか小さめの箒を片手に、きょとんとして隣のドアから出てきた青年たちの方を振り向いた。

一番先に出てきたのは波限であったので、眼鏡の眼と彼女の眼が合う。

「……おはよう、ございます……」

遠慮がちに口を開いたのは彼女が先だった。

源助を肩に担いだ波限が無愛想にぺこりと軽く頭を下げた瞬間、後ろから青一郎がひょっこりと顔を出し、

「あーおはよーございますー。朝からうるさくてすみませんねー。お掃除ですか？ おれたちこれから畑仕事なんです、土おこして大根の種まきして……って何するんですか、なぎささんー！」

波限と正反対に愛想がすくぶるよい青一郎は、その女性に向かってぺらぺらと喋り出すが、彼にずるずると通路を引きずられる形で女性の前から退却させられ、一階へと階段を下りていった。

一陣の台風のようなそれを、彼女——守口^{もりぐち}初夏^{はつか}は、きょとんとしたまま見送った。

「ぶっはー！ あれが、『はつか』お嬢かー。ほんま大根のような

色白のべっぴんさんやなあ。まあ、清白様の美しさにはかなわんがな！」

流石に二人以外の前では普通の大根らしく黙っていた源助は、アパートの裏に位置する畑まで来ると、堪えきれなかったように息を吐き出し、波限の肩から下りた。

「絶好のタイミングでしたねー。ってなぎさんもお話すればいいのに」

青一郎が引つ張られた襟首を直しながら、十五センチほど上に顔がある波限を見上げて抗議する。

「うるせえよ……」

——何が絶好のタイミングだ。こんな大根担いだよーなジャージ姿見られて……っていつもロクな格好してねーけどな！

ぼそりと呟いた後、そう考えた波限は非常に不機嫌そうに、

「んで！？ 何すりゃいーんだ！」

と半ば自棄くそのように源助に怒鳴り、「おお！ ようやつとやる気になってくれたんか！」と喜ぶ彼の指示の下、大家である老人が「何か作るならどうぞ。ちゃんと出来たら頂戴ね」と無料で貸してくれた不毛な土地に鍬を打ち付けるのであった。

——好意を持っている人間に対し、何故かいつも格好悪いところしか見せられないのは人の世の常である。

何より声を掛けようものにも、このご時勢。帰りが同じ方向というだけで、若い女性に尾行られていると勘違いされるような時代（そういう悪漢が実際にいるからいけないのだが）。

だから隣人の若い女性に対しても、無関心な風を装っていないと変に警戒させてしまうかもしれない……と波限は思っているのである。

その割に青一郎はあの持ち前の愛想と人の良さで、ああやって気軽に挨拶を交わし、それをうらやましく見ているのだが。

——って、あーもー知るか！！

播種どころかとりあえずは開墾に時間がかかりそうなほどの、無料で借りられたのも領ける不毛な土地。しかし固い土もなんのその、妙な苛立ちと焦りから自棄っぱちに鋤を奮う波限の虚しい姿を遠くに見ながら、青一郎と源助がぼそぼそと喋っている。

「知ってる？ 波限さん、話したこともないのに何ではつかさんの名前知ってるか。ほら、女性の一人暮らしって表札なかったりするじゃん。それで荷物がうちに間違っって届いちゃって、それでようやく名前が分かったんだってー」

「成程。それで彼女はんの荷物にどつきどつきしながら、隣に持つてってあわよくば上がりこもうとか考えとったけど、妄想に終わってたつつわけなんやな。でも初めて話せてそれだけでラッキーとか思っとなる……って言えば言うほど、この土のように不毛で可哀想な兄さんやなー」

源助のそれこそ妄想交じりの解釈に、「アホ共！ くつちゃべつてねーで働け！」と波限の怒号が飛び、石の礫も一緒に飛んでくる。はあーい、と二人は立ち上がり、ごろごろと転がっている石を拾い始めた。

しかし更に青一郎はため息混じりに同情したように呟く。

「はつかさんは、三年も彼女のいない仕事に疲れた寂しいサラリーマンの唯一の癒しなんじゃないですか……。いい年こいて切ない純情片想い……泣けるよねえ」

「ひとめぼれってえやつかい！ まるで米のよーなやつちゃな！（銘柄）よっしゃ！ ワシにまかしとけ！ 恩人はんの恋、必ず成就したるで！」

と、息巻く源助の横に何かが高速でざくつと刺さった。

「余分なコトしなくていいーから、早く石拾いな？ それとも此処でオマエが畑の肥になるか？」

突き刺した鋤を抜きながら「ああ？」と凄む、目付きだけは人一倍悪い安月給サラリーマンの鬼気迫る迫力に、思わず震えのきた二人は、すすすみませんーと言いながらいざ、大根作りのための土地

の開拓に今度こそ精を出したのであった。

——別に、好きとかそーゆーのでは、ない。

ただ言葉どおり、癒されただけだ。

何回か顔を合わす中で、その笑顔に、物腰に、声に。

何も知らなくても。ただ、それだけだった。

この荒れた土地のような不毛な思いを打ち砕くように青年は鍬を振るい、作業をしつつも軽口を叩いたり遊んだりする少年と大根を怒鳴りつけながら、この日、春のうらかな光の中、賑やかな開墾作業が行われたのであった。

アパートの南側に面しているその畑の賑やかな様子を、二階のベランダから布団を干しながら隣家の佳人が穏やかな表情で見下ろしていた。

米と麦（１）

さてそれから二週間後の、晩春の空気が爽やかな金曜日の夜のこ
と……。

この波限という青年は、現在彼女もいなければ、職業柄接待とい
うものもない。付き合いに積極的に参加しなくても今のところ出世
とは関係なく、深夜に及ぶ残業も忙しい時期でない限りはしなくてよ
い。

そして酒は飲めないわけでもないが毎日飲みたいほどでもない。
ついでに知らない人間（特に女性）と話を合わせるのが苦手なので、
合コンも断り続けていたら話はこなくなった。

つまりのこと、義理や友人の誘いが無い限り飲み歩く——もとい、
飲む打つ買うの欲望に関して金を掛けることを、波限はしない性質
であった。

だったら寧ろその分貯金して、折角それなりの成績を修めている
のだから、本人が望むのであれば青一郎の進学の足しにしようと考え
ている生真面目な青年。青一郎自身も頑張つてアルバイトに精を
出しているようであるが、それで成績が下がってしまったえば本末転倒
なのだ。

十歳しか年は離れていないのに彼の母親への負い目も手伝つて過
保護といえは過保護であるが、安月給しか収入源がないため、本当
に節約しないと高校生を養つては暮らしていけないのである。

また原則家事は当番制としている。今日は一応波限の当番の日で
あった。そんなわけで金曜日の夜であるにも関わらず、波限は夜七
時に帰宅した次第であった。

波限の部屋の明かりは点いている。しかも左隣の青一郎の部屋の
明かりも点いている——ことから青一郎は自室にいるようだ。……
ということとは、間違いなく波限の部屋には今、あのハイテンション

な大根がでーんと座って今日も家主である波限の帰りを待っているわけである。

思わず吐かれる大きなため息。家に帰ったのになんとなく余計に疲れる気がし、ドアを開けるのも躊躇われる波限であったが、ふと右隣の部屋をちらりと見ると、その部屋にも明かりが灯っていた。

……彼がこっそりと懂れている年下の女性、初夏の部屋である。

明かりだけでも自分の殺伐とした部屋と違い、妙に淡く癒される感じがする——あたり、相当不毛で寂しいのかな、と彼は空しくなる。

でも彼女の部屋にもいつもこれくらいの時間は明かりが点いている。そして何より、男が家に入るのをまだ目撃したことがない。——ということは……と、波限はまたどうでもいいことを考えそうになるが、そんな妄想をぶんぶんと振り払うと、自分の家のドアに手を掛け、現実へと足を踏み入れた。

……が、そんなことをしなくても「現実」の方から彼を迎えに来てくれたのであった。

「おっけえりー!!」

ドアを開けた瞬間、本日はいつも以上に熱烈な歓迎ぶりで、件のトラブルメイカー、源助大根がだーっと走ってくると波限の顔に飛び上がって抱きついてきた。

いつもは下手をすれば、部屋の真ん中に寝転がりテレビを見ながら、手の代わりをする根で尻のあたりを掻きつつ、「早よメシの支度せーやー」などと偉そうに言っているくらいであるのに、一体どうしたと言っのだろう。

「今日は記念すべき日なんやー！ 無事に、ワシらの播いたダイコンの種が元気な芽を出したでー!!」

波限の肩に両足を掛け、腕を彼の頭へと伸ばしてその体制を保ちながら、嬉しそうに源助は言う。

不毛の土地を力づくで開墾し、それでも土が固く養分も少なかっ

たので、大家の老人の友人である農家から分けてもらった畑の土を足した。そして何とか作物が植えられる状態とし、肥料も撒き、ようやく播種を行った――この作業のほとんどを波限が行ったので、確かに枯れてしまったという報告よりもその内容の方が、何十倍も嬉しかった。

「そりゃよかったな」

しかしそのハイテンションに付き合うのも疲れるので、波限はあっさりとその答えると、肩の大根を振り払った。

「なんやもつと喜びやーて」

と相変わらず何処の方言だかわからない訛りで、ぶつぶつ不服そうに言う源助であつたが、それを無視してワイシャツから部屋着のジヤージに着替え、急いで夕飯を作ろうとした波限は、ふといい匂いがしていることに気がついた。

「おかえりー、なぎささんー」

そしてこの騒ぎで波限の帰宅に気付いたのだらう、青一郎がこちらの部屋へとやってきた。

「今日、源さんが学校まで芽が出たって教えに来てくれて、それでおれも早く帰ってきて、もうご飯作つといたんですよ」

――コイツ、高校まで行ったのか！？

波限は驚愕して二人を見比べるが、妙にウマの合う二人はにこにこ顔を見合わせている。

逆に、源助が自分の職場にも来るかもしれないことを想像して、

波限はやめてくれとぞつとしていた

「だからそのお祝いに、今夜は大根メシ作りましたよー！」

そこで嬉しそうに青一郎は片手を伸ばして炊飯ジャーを指し、源助も一緒に根を誇らしげに伸ばす。

「祝い……って……」

しかし波限の反応は冷たかった。

「……ただ単に米が切れかけて、ダイコンで嵩増ししたただけだろ？」

ため息交じりのその言葉に、思わずぎくつとする青一郎と源助。まるで「おし●」のような食生活（「お●ん」がわからない子はおかさんにきいてみよう）ご馳走なのかそうでないのか甚だ疑問である。

それは別にこの大根が悪いのではなく、どちらかといえば大食いな青年男性二人が食費に困っているこの状況がいけないのであり、寧ろ大根を提供してくれるだけでもありがたいと思わなくてはいい。

それにその大根飯とやらも、空きつ腹にはいい匂いがした。

「米にダイコン！ 身体もあつたまるし、ビタミンに消化酵素も一緒にとれてええやないか、なあ」

「そーですよー。それにおれたちが植えたものが収穫されるのはまだもう少し先だから、その間はわざわざ源さんが故郷からダイコン取り寄せてくれてるんですよー」

まーた怒られるかなーと、家主の機嫌を伺うように、二人で口々に言うのと左右から波限の顔を覗き込む。

確かに恩返しの内容は、「一生分の大根に困らないようにする」とと波限は聞いている。

こんな風に取り寄せできるんなら、いつそ人に作らせないで送ってもらおうぜと思うが、源助曰く、手間隙掛けて育てることで収穫される大根への感謝と愛情も沸き、更にそのことにより食べられる大根も喜んで栄養分が増幅するのだ——という話。それよりもクニから送ってもらえる大根も数に限りがあるので、そんな年から年中もらえるわけないのが実情のようで、それら御託を聞くのも面倒臭くなってきた、結局自分で作っているのである。

だが、これをきっかけに最近では他の野菜も自給自足にしようかと折角開墾した土地を見て思うようになり、なんだかんだで彼はこの栽培生活に馴染んでしまっているのかもしれない。

「いーから食おうぜ。腹減った」

そんな結論に落ち着いたからか、意外に穏やかであった波限の台詞に、台所に立つその背中の後ろでほっとしたように残りの二人は顔を見合わせた。

「今日は大根サラダと大根菜の味噌汁と、大根と挽肉の煮物ですよー」

青一郎もそう言いながら、短時間でよく此処まで作ったなと思われる、彼が作った料理を台所から運び始めた。

そして慎ましやかな金曜の夜の夕餉ゆづけが始まったのであった……。

「あ！ そう言えば、麦と粟ひえと稗ひえでよければどうぞ、って大家さんが持ってきてくれましたよー」

「お、よかったな」

そしてこれまた意外と美味しい大根飯をかき込みながら、波限はうんうんと頷いた。

近年は雑穀ブームなのもあり、主生産ではない雑穀米はかえって単価が高かったりするので、日常的に混ぜているわけではないが……もしかしたら、実際に自作すればコストは米よりも掛からないかもしれないが、さすがに野菜以上のものまでは手を広げる自信はない。

しかしそれこそ大根でも麦でも、タダで貰える食べ物でカロリー源、栄養源になりそうなものならば、なんでも米に混ぜて量を増やそうという、食べ盛りの二人なのであった。

「麦は食物繊維も豊富ですし、雑穀ご飯も体にいいから嬉しいですねー」

そうなのである。更にはこの慎ましやかな食卓は、彼らの健康にも一役かっていた。

彼らの均整の取れた体格や医者要らずの体は、元からそうではあったものの、意外とこの食生活がそれを維持していた。

しかし青一郎はまだ成長期のため、こういうものを利用して上手く家計をやりくりし、動物性タンパク質も毎日とらなければ筋肉も

発達しない。まあ身長が低いのは母親譲りであり、栄養失調などではないと波限も思いたいものだが。

とりあえず米が切れそうだったこの家庭でも、ひとまず主食はなんとかかなりそうであった。

その話題が一旦途切れたところで、美味そうに大根を屠る二人を幸せそうに見ていた源助が、ふっふっふと話を切り出した。

何だよ、と波限が嫌な予感に不気味な笑い声を出す大根を見下ろすと、

「聞いてくれんか！ ワシなあ、恩人である聖護院のためにな、このムツツリがよう声も掛けられん、お隣の『はつか』ダイコン……じゃなかった、お嬢のこと調べてきたんやでー！」

その発言にぶぶーっと古典的に大根菜の味噌汁を吐き出しそうになる。ちなみに大根の葉の部分は少々苦いが、ビタミンにカルシウムリンに鉄分等々含まれているとても栄養分が豊富な部位なのである――それはさておき。

「すっごーい。どうやって調べたんですか？」

むせ返って言葉も出ない波限の代わりに、青一郎がその言葉に反応した。

「ふっふっふっ。ワシのこのダイコンというフォルムが、見事なまでの尾行を完璧にしたんや……」

隣の佳人、初夏を尾行したときのことを思い出し、その成功の達成感に酔い痴れる大根。

……それは彼女に振り向かれては普通のダイコンのように横たわったり、通行人の目に触れないように塀の上を歩き、人に見られそうになれば電柱の影に隠れたり、時には八百屋のダンボールの中に入り、猫に追い掛け回されたり……といった名（？）尾行ぶり。

「つつうかな、何度もチャレンジして、今日ようやくと成功したんや！」

源助はこれまでの苦勞を思い出し、（体内の水分を飛ばして）おいおいと泣いた。

——それだけ失敗して、よくそれで人に見つからなかったな……と内心では思う二人であつたが、謎めく女性の正体は氣になるところでもあつたので、青一郎は「それでそれで？」と源助の尾行の結果を聞くべく話を促し、波限もちやっかりと聞き耳を立てていた。

米と麦（２）

この源助大根。密かにに平日の昼間は家で何をしているのかと思うが、意外と勤勉家なのであった。

この家では朝七時に青一郎が高校へ出かけ、七時四十五分に波限が出勤する。その後、二人の部屋の掃除を手ぬぐいと櫛を付けてばたばたと丁寧に行い、器用に風呂とトイレの掃除までもする。

そのあと特製ドリンク（石灰を水に溶かしたもの）で栄養補給をし、大根畑の草取りや水遣り。そして大根が収穫出来るまで、波限の家にきちんと大根が届くようアパートの近くの公衆電話から本社（？）に電話をして大根を送ってもらったり、その申請書や報告書を作成したりする。

そのうちに夕方となり、再放送のドラマなどを見ていると、青一郎や波限が帰ってくる——という結構充実した毎日なのであった。しかしここ最近はいつもの家事も行いつつも、その尾行劇を思い立ち、恩人の青年が密かに想いを寄せているらしいある謎の一人暮らしの女性の正体を探って喜ばせてやろうと、実行に移したのであった。

その結果……、噂の隣人、守口初夏嬢は毎日八時十五分に家を出ている。それは平日毎日ではなく土日もそうであったりするので、休日は不定期らしい。

そして彼女が歩いて向かった先は隣町の大手菓子店であった。

「お菓子やさんの店員さんー！」

青一郎が納得したように叫んだが、

「……って、面白くない……」

その後がっかりしたように唇を尖らせた。

「水商売とか実は三人の子供持ちとか、何処かのスパイだとか、そういうオチじゃないんですねー。ちえー、」

寧ろそういう妄想が楽しいお年頃。失礼なことを言う青一郎を波限は小突いた。彼と言えば密かにそういうオチではなくて安堵していたのだが……。

「作る方やのうて、売り子さんとか事務さんらしいねんけど、愛想ようにここにこして客も喜んどってん」

「本当ーに見たまんなんですね」

青一郎は本当につまらなそうだった。……この少年の好みの女性のタイプはどんなのだろうと、波限は想像するだけで恐ろしい。

「ありや年寄り受けするわ、あのテアイのお嬢は。見合い話のひとつやふたつやみつくらい、来とるんやないか。ってか、あーゆーええ子は男がほっとかんやろー」

まあ清白スシロ様の美しさにはかなわんけどな、いつもの台詞で締めた源助の言葉に、

「あーそうだねー、あーゆー人ってオトコが好きそうだよねえ」と青一郎も同意し、ぱん、と二人同時に波限の肩を叩いた。

「「頑張らない（ん）と、先越されますよ（るで）」」

「やかましいわ！」とその二つの腕を振り払うと、波限は残った夕飯をががつと乱暴にかき込み、さっさと茶碗を台所へと持っていった。

そして飲みに行く余裕はないが、週に一度の楽しみで晩酌の缶ビールを一本持つてちゃぶ台へと（他に居る場所もないので）戻ってきた。源助の隣人考察はまだ続く。

「ほんでな、見とると毎日同じ時間に帰ってくるし、仕事が休みの日も出かけるみたいやけど夜には帰ってくるし、ワシの勘やけど男の影はないんやないかなあと思うけどなー」

「……」

ビールを飲みながらテレビをつけ、七時のニュースが既に終わってしまったのでとりあえずドキュメンタリー系の番組にチャンネル

を合わせ、画面のキャスターを無言で睨みつける波限であったが、内容も映像も何も頭に入ってこず、耳は源助の話に集中してしまっていた。

「うーん、でもそういうのってお相手さんの仕事とかにもよるから夜に会ってるとは限らないし、お休みの日の昼間会つてるとか、遠距離恋愛とかの線もまだ捨てられませんか……。実はあんな清纯そうな顔して、やり」

青一郎のその言葉を遮るように、波限は彼の顔面に手元のクッションを勢いよく投げつけた。可愛い顔してとんでもないことを平気で言う、お年頃の男子高校生である。

——まあ確かに人は見かけではない。考え出したらきりがなが、気になるなら失礼なことを言っていないで本人に聞けばいいだけの話だ。波限はそうのように考える性格なのである。

すみませんー、そーゆーギャップが好きなんです……。と青一郎は苦笑いしているが、源助がまた何かを思いついたようにぼん、と手を打った。

「せやったら今度、休みの日も尾行しよか？」

「やめとけ」

しかし再びテレビに視線を向けながらであるが、すかさず波限がそれに反対した。

「えーそんなことゆうて、知りたいんやないのー？」

とととと、と波限のところまで歩み寄ると、可愛くもないが彼の膝に肘を付き、頬杖をついて見上げる大根。頬の肉があるならばつねってやりたい気分になりながら、波限はぶすりとした声で答えた。
「他人のプライバシーを覗き見るのはいかんだろ」

何より、この大根にあまり外をうろつろされて騒動になっても困るというのが一番の理由であるのだが。

——真っ面目だなー。ほんととはあーんなこととかこーんなこととか知りたいんじゃないのー？

と大分学習能力がついたのか、それ以上冷やかすことなく黙る青一

郎と源助であつたが、だからと言って「本人に聞くからいい」とは言わないこの奥手なのか生真面目なのかわからない青年を、非常にもどかしいような眼で見っていた。

——青一郎はまだ高校二年生であるが受験を来年に控え、何より学生の本分は勉強である。勉強部屋というのを名目に、それとやはりプライベートな空間は互いに必要であると考え、二人は貧乏でも部屋を別々にしているのであつた。よつて仲はいいが眠る時は別々であり、波限は静かになつた部屋の天井を見ながら一人、考え事をする。

それにこの街の家族用のアパートの相場はどれも新しく家賃が高く、このオンボロアパートを二部屋借りてもそれほど変わらないことと、青一郎もおそらく高校を卒業すれば、自分の元を去るのではないかと波限は予想していた。そのために世帯は別々にしているのである。ちなみに就職をきっかけに田舎を出た波限が先にこのアパートで一人暮らしをしていたところに、母親を亡くした青一郎がやってきた次第なのだ。

閑話休題。

ということで源助は青一郎の勉強の邪魔にならないよう、波限の部屋にダンボールと古いタオルで寝床を作つて寝かせていた。ちなみに同居相手が所詮大根なので、波限も一人になりたい最低限の間は持てていた。

そのうえ小さい身体であれだけ騒いで動いているからか、源助の就寝は早く、そして深い。

一人前にかいている鼾の音を、暗闇で聞きながら波限もまた布団に寝転びぼんやり考えていた。

……口も利けない相手のことを調べるなんて、そんなストーカーまがいのことはしてはならないと思つていた。源助が大根であるか

らまだ可愛い図……に見えるかもしれないが。

勤め先が分かったからと言って、彼女の「何」が分かったわけでもない。

それは全て表面的な情報で、彼女のことは未だに何も知らないのだ。あまりに少ない情報量から、この未確定で未確認の感情は雲を掴むような幻想で、まだ「それ」と名を付けられるものではないと波限は思っていた。

なので青一郎や源助がけしかけてくるような、「それ」に相当する行動や言動を起こすつもりは全くなかったのだ。それこそ高校生でもないのに恥ずかしい、といった気持ちもある。

ぐだぐだ考えているうちに波限も眠くなってきた。

——きつとこんな考えを青一郎にでも言えば、「だから三年も女が出来ないんですよー」とかなんとか、男女関係なく人間付き合いが円滑であり、その点では自分よりも妙に大人なあ少年に何か言われるんだろっな。

そんなことを考えながら、そして最後に最近その顔を見ていないな、と、隣の佳人の顔を少し思い出し——波限は眠りについた。

米と麦（3）

その次の週の日曜日のことだった。初夏しよかの空気が感じられる日差しの中、源助の口うるさい指導の下、大根の芽の初めての間引きを行った。

播種から一ヶ月もすれば、立派な本葉になってきた。あの大根の言いなりになるのは悔しいが、この急ごしらえの荒地にでも必死に健気に育とうとする作物には、確かに波限でさえも愛着が沸いてきてしまうものであった。

その次の週の土曜日、波限は旧友に誘われ珍しく飲みに出た。友人の結婚報告の話で盛り上がった。青一郎はアルバイトに出ており、夕方はすれ違いになった。

次の日の日曜日は、また青一郎は朝からアルバイトに出ていたのだ、煩い大根と共に先週よりもずっと大きくなった本葉の間引きをしようと波限は外に連れ出された。

「間引きした葉は間引き菜つつてな、これがまた栄養価が高いんやぞー」

との話なので、早速今夜の夕食にすることにした。そう思えば結構使いどころの多い栽培食物である。

そしてこれもまたよくあることであるが、源助が畑で波限にあれしろこれしろと言っているところを、あやしいヤツと野良犬に認識され、彼は追いかけ回される羽目になり、叫び声を上げながら何処かへと逃げていった。

食われるなら自分の見ていないところで食われてもいいぞ、という残酷なことを考えながら、波限はそれを見無視して黙々と作業を続けると、草むしりまで済ませ、午前中の作業を終わらせた。

そして昼飯、何にしようかなーと思いながら一人で自分の部屋へと階段を上がついていった——ところ……。

いつの間に先に階段を上っていたのだろうか。久々に見る——その髪の長さも雰囲気も変わっていないが、格好は爽やかで涼しげなものになり細い腕が一層際立つ服を着た、例の隣人、初夏が丁度鍵を開け部屋に入ろうとしているところであった。

「あ。こんにちは」

女性の方から礼儀正しく頭を下げる。

波限が隣に女性が引越してきたことに気付いたのは一年と数ヶ月前。確かに隣に得体のしれない若い男が二人で住んでいて警戒しないわけではないだろうが、それでも隣の部屋の彼女はこのような常になぎこちないながらも微笑んで、彼に挨拶してくれる。

どうも、と相変わらずＴシャツにジャージに軍手、タオルを頭に巻いた農作業姿の波限もまた無愛想にぺこりと頭を下げたのだが——ふと、思いついてしまった。

買い物帰りだろうか。大きなナイロン製の青いチェック柄の袋を肩から提げた初夏に、波限は先程抜いてきた栄養豊富という大根の間引き菜が入った小さなコンビニの袋を日焼けした腕でずい、と突き出すと、唐突に言ったのだった。

「——食いますか？」

その晩。

「どわーはっはっはっはっ！」「という二人分のそれこそ近所迷惑になる程の大笑いが、アパート中に響き渡った。

「うるせえ！」と思った波限だが、反論するのも嫌なほど触れて欲しくないことだったので、二人を無視して黙っていた。

彼も昼の一件は話すつもりはなかったのだが、

『あれー？ 間引き菜があったはずだって、源助さんに聞いたんですけど、どしたんですか？ 今夜のお夕飯じゃ……』

『……』

『捨てるわけもないし……誰かにあげたとか？』

『……』

『まさか……！』

『……』

以下、笑い声に続く。

波限は一言も喋っていないのだが、嘘のつけない性格なので全て表情に出ていたのか、青一郎は質問するだけでことの顛末を勘よく察してしまったようだった。

「まー、聖護院なりによう頑張ったってことやなー」

大根がばんばんと自分の肩を叩けば、

「で、でも今のままだと間違いなくなぎささんのイメージって、ただの『家庭菜園が趣味の人』ですよ……」

青一郎も悪いと思ったのか、笑いを堪えているようではあるが、かなり酷い事を言ってくれる。

——しかし確かに、その印象しかないのは事実だと思うし、第一米もろくになく、雑穀を混ぜて食べているような貧乏で甲斐性な男など、普通の女性ならまず願い下げであろう。

無駄に大根料理のレパートリーが青一郎と同様に増えた波限が作っておいた、ふるふき大根をちゃぶ台に運びながら、無表情であるが打ちひしがれてしまっている彼を慰めるつもりで、青一郎はにこにこと笑うと更にとんでもないことを言った。

「でも、大丈夫ですよ。ちゃんと言ったときでしたから」

何を……？と嫌な予感がしながら、波限は立っている少年を見上げた。

「すみません。波限さん昨夜遅かったんで、言いそびれちゃったんですが、昨日おれが夕方バイトから帰ってきた時に、下で一緒になったんですよ、はつかさんと。それで色々（一方的に）お話しして——兄弟じゃないけどなぎささんは親のいないおれの面倒をよく見てくれてるとか、年収***万円の公務員だとか、あと健康志向で妻

飯大好きで、清楚な女の子が好きで現在彼女がいなくって……（以下延々と続く）

——だーっ……

その言葉に波限は発狂しそうになりながら、ちゃぶ台に頭をガツと打ち付けた。

「……って言うとききましたから……。ってどしたんですか？」

「よかったやないかー。嬉しゅうて泣きよるんかー」

と、きよとんとしている青一郎に続き、呑気なことを言う大根が、机に頭をぶつけたまま悶絶している青年に声を掛ける。

……って、何勝手に売り込んでくれとんねん！（妙な方言がうつた）と心の中で突っ込みながら、青年は恥ずかしさの余り言葉もなく落ち込んだ。

今日の気まぐれで思わずしてしまったことはそれだけでも恥ずかしいと言うのに、昨日の時点でそんな風に高校生を使って己をアピールしていたと彼女に思われていたとすれば、今日のこともどのように映ったことか……。

それを知っていれば、間違いなく今日あんなことはせず、彼女のことを避けた。

ただの隣人というだけの間柄だ。変に警戒されたくはない。それこそその気がなかったり彼氏などいれば、彼女だって恐いし気持ち悪いだろう。だからいかにも「気があります」的な行動は避けなくてはいけない——と波限は思っていた。なのに、今日、どうしてあんなことをしてしまったのか……。

だがいくら後悔したところで、彼女にとっては昨日今日の一連の出来事は別のものとは認識されず、寧ろ乗算されて「波限のイメージ」となってしまうことだろう。

なので昨日は昨日で己を売り込み、今日は今日で収穫物のプレゼント——なんてことをする二十代の男への予想されるイメージはただひとつ。

——俺って……なんかすっぱー痛いヤツじゃねえかつ！？
結果として痛々しいものになってしまった行動の数々に、青年は
ショックに打ちひしがれるとその場に倒れ込んだ。

その後……。

食事も喉を通らず、部屋の隅で横になって涙でも流していそうな
青年を見やりながら、

「どしたんですかねー？」

「今頃ドキドキしてるんじゃないかー？ これで一気にお近づきにな
れるとええなあ。いよっ！ 純情色男！」

と、雑穀の混じったご飯とふるふき大根の健康的な食卓を囲む残り
の二人は、相変わらず呑気なことを言っていた。

——解っている。青一郎はまだガキだし、本人は悪気も無く親切
のつもりだし、こいつらには心配されるような自分の態度が問題な
のであるから叱るつもりはないが……。だが、今の時点でのイメー
ジは、無口な自分よりもあの少年の方がよいのではないか？

話さないから余計に取り繕うことも出来ず、イメージだけが低下
していくことに、別に「そう」いうわけでもないのに、波限はどう
すればいいんだ、と何かジレンマを感じていた。

そして彼女と一定の時間会話をしたのである。青一郎を、深層心
理のどこかでほんの少しだけうらやましく思っているような、自分
でも持て余す「彼」という存在があった。

そうやって無意味なほど気になってしまうのも、ほんの気まぐれ
でも「相手に何かしてあげたい」と思ってしまったのも、全て相手
に何かしらの特別なものを抱いている所以なのだが、未だそれは青
年の中で、「未確認の感情」とされていた――。

遠距離（１）

さて、入梅前によく晴れた初夏のある日――。

「遂に……」

「やりましたね……！」

「収穫やー！！」

相も変わらずハイテンションな大根と可愛い男子高校生と仏頂面のサラリーマンが、土曜日の昼下がり、アパート裏の大根畑でそれぞれ感慨に耽っていた。

苦労した開墾から約二ヵ月、ようやく春撒き大根の収穫日と相成った。

逆に言えばこの奇妙な大根とそれだけの時間、生活してきたのかと思うと不思議な感じも波限にはするのだが。……というかこの先も一生纏わり付かれるのか、と思うと少しぞつとするので、彼はあまり考えないようにしていた。

そうは言っても大根の収穫はめでたいことである。食費的にもであるが、やはり源助の言うとおり手を掛けた分だけ作物は応えてくれる。その達成感は確かにあった。

「思ったより、よく育ってんな……」

素人だし失敗するに違いない（そして源助に適性無しと諦めて欲しい）と思っていた波限だが、抜いてみた大根の意外な立派さに思わず唸る。

「そりやーちゃあんと手え掛けた、聖護院の愛情の賜物や！」

「……」

その笑顔（目鼻がなくてもどういう表情がなんとなく分かるようになってしまった）に、どう反応してよいかわからない波限であったが、

「……もあるけど、このワシが授けた種はそんじょそこらの農協に売っとるモンとは違うでー。ええ品種なだけやない、その中でも更

に栄養をよう含んどって精力（ 変な意味でなく本来の意味ね）の強え、生き残りに勝ち抜いたヤツから種を採るんや！ だから生命力も抜群やし、栄養も満点、素人でも育てやすく立派なモンが出来るんやで！」

大根社会のくせに動物のような頂上決戦があるようで、深く考えとなにやら種馬の育成のようで手元のコレが不気味にも思えるが、とりあえず納得のいく答えに、波限は素直に「ふーん」と頷いておいた。

しかし栄養面や育てやすさという意味では、個人で種を買うよりもやはりお得であるのだろう。波限はついでに大根畑の隣に植えたナスとトマトに水を遣ることにした。

家庭菜園が趣味というわけではないが、彼は理系を専攻していたのもあり、思わずナスとトマトの苗を買ってきて畑の端に植えてみたところ、意外にこちらにも上手く育ちつつあった。夏には何とか食べられそうな状態で収穫出来そうである。

「じゃあ、記念すべき初物はやっぱりはつかさんにもあげるんですかー？」

母親の位牌の前に供えようと嬉しそうに大根を抱きかかえ、頬に土をつけた顔でにこにこ笑って波限を見上げる青一郎。黙っていたら天使のように可愛い少年であるのに、相変わらず返答に困ることをズバズバと言ってくれる。

「知らねえよ」

波限は素っ気なく答えると、近くの用水からバケツに汲み上げた水を古典的に柄杓で蒔いた。青一郎の言葉に先月の失態を思い出しそうになり、眉間に皺を寄せる。

「はつかさんも毎日自分でごはん作ってるみたいだし、いいと思うけどなー」

青一郎は大根の土を払い落としながら呟いた。夜になると隣の家からはいい匂いが隣してくることから、既に周知のことであった。

「ダイコンかて、べっぴんのおねえやんに食うてもろーた方が嬉しいと思うけどなー」

ついでに源助大根までも余分なことを言ってくれろ。

「じゃー、お前らがやってくればいいだろ」

波限は柄杓の水を土に向かって乱暴に掛けると、五月蠅い彼らへそう言い放った。

「「それじゃー意味が無いじゃん（やん）！」」

しかしそれはあつさりど、二人から同時に言い返された。

「折角話せるチャンスなんやでー。他に話す機会もあらへんやん！」

「それに別におれが行ってきてもいいですけど……、『なぎささんからだ』ってちゃんとアピールしますからね！」

「いらんことをするなっ！」

今にも柄杓をぶん投げそんな勢いで、波限は勢いよく青一郎を振り向いた。それでは先月の二の舞である。しかも弟のような高校生を使って自分を売り込ませているなんて、尚更イメージ悪い。それに好きでもない男にそんなことをされても、普通は気持ち悪いだけではないか

しかし勝手に盛り上がっている二人も収まらないので、仕方なく彼はぼつりと呟いた。

「……せめて偶然会ったら、にしておけ。わざわざ家まで訪ねる必要ねえからな」

たった壁一枚の距離なのに、ないようでしっかりと距離がある。残りの二人はつまらないー等々ぶつぶつ言いながらも、本人の意思は固そうなのでそうすることとした。

しかし得てしてそういう期待をしている時に限って、会えないのが世の常である。

畑から戻った時も、午後スーパーで一週間分の買い出しをした帰

りも、今日は初夏の出勤日なのかそれともデートなのか、彼らは彼女に行き会うことはなかった。と言ってもやはり先程の理由から突然渡すこともためられるので、最近また顔を見ていないのは事実だが、何処かほっとしている部分も波限の中にはあった。

そんなこんなで夕飯はこの六月という時期にも関わらず、おでんを囲むことと相成った。祝いということで、本日の波限の夕食は晩酌付きだ。もちろん青一郎の部屋にある、彼の母親の位牌の前にも大根と共におでんが置いてある。

「初物は東を向いて笑いながら食べるんですよー」

青一郎の言葉に、彼と源助はきちんとそれを実践し、わはははと笑いながら食べていた。

波限は何処に口があるのか知らないが、皿の上の大根が何故か減っていく源助の生息に疑問を持ちつつ、「共食い……？」と心の中で突っ込みを入れながら、黙って冷酒と一緒に自分の収穫物を突いていた。

そしてその楽しい宴の中、源助が突然しんみりと話を切り出した。「これで、ワシも安心してクニに帰れるわ……」

「ええ！？」

波限と青一郎は揃って源助を見た。片方は非常に嬉しそうな、片方は非常に残念そうな顔をしているのだが。

「えええー！　なんでー！？」

「そーかそーか、気をつけてな。今まで世話になった。うん」

青一郎は泣きながら減助に抱きつき、波限は手の代わりをしている根を「二度と来るなよコノヤロー」と思いながらぶんぶん振った。

「違う違う！　違って！　明日一日里帰りするだけや。日帰りやで。なんでワシが使命を全うせんと帰るんや。ちゃあんと恩人の一生分の根の面倒は看るで！」

あっさりと期待が打ち砕かれ、再度のその宣言に波限はがーんと青ざめ、青一郎はよかったーと嬉しそうに胸を撫で下ろしている。

彼の言う大根の「クニ」とやはらしくもって不明であるが、かなりがっかりした波限も、たつた一日でも居なくなってくれるだけでもよしとしよう、ついでに里心がついて二度と帰ってきてくれなければ、もっといいのだが、とこっそり思っていた。

「つつうかただ単に帰る口実作って、清白様に会いただけなんやけどな！」

誰も聞いてなどいないのに自分でそう言うと、「きゃーラディツシュになっちゃっうよー！」と源助は体中を真っ赤にしていた。

青一郎は「よかったですねー！」と一緒に喜んで、波限は相変わらず源助の謎の生態に疑問を持ちつつも、まあ好きにやってくれとそれを放っておき、酒のつまみの大根を口にした。

——これだけご盛んな大根であるのだから人の恋路もうだうだ言いたくなるのかもしれない……。いつそどうせ取り憑かれるなら普通の大根がよかった、とも思ひながら。

そして次の日の日曜日。「すつずしろ様ー待っててくださいね♪」と鼻歌を歌いながら、身支度を整え風呂敷をひとつ背中に括りつけると、朝早く大根は旅立っていった。

ちなみに普通の大根のフリをしてトラックやバスなどを乗り継いでいくらしい。

「気をつけてくださいね」

と同じくアルバイトのために早起きし、それを優しく見送る青一郎の声を、一応起き上がったもののまだ半分眠っている頭のどこかで聞きながら、別にもうこのままどつかで遭難してくれてもいい…….
 と思っっている自分は性格が悪いのかな、と波限は密かに軽い自己嫌悪に陥りそうになっていた。

——今日は天気良かった。日曜の朝にゴロゴロ出来るほど、贅
沢な幸せはない。

波限にとつてはこの数ヶ月間なかったとても静かな朝だった。ラ
ジオ体操の曲も鳴らず、変な方言も聞こえてこない。

日頃の仕事のストレスから久々の二度寝ができる幸せを噛み締め
て、波限は布団の中で寝返りを打った。そうは言っても特別なこと
は何もなく、今までどおりの「普通」の日曜日となっただけの話で
ある。今までの日曜日は休日出勤することもあれば、無心に身体を
動かしたり（だから畑仕事も性にあったのだが）、将来への展望を
持って仕事関係や資格等の勉強をしたり、ごくたまに友達と出かけ
たり、家事をしたり無駄にゴロゴロしたり…… e t c.

何年か前に彼女がいた時は、また別の過ごし方があったような気
もする波限だが、あれはあれで休日のたびに気を遣い、面倒くさい
ところもあったのだ。——そう感じていたから上手いかなかった
のだろう。

何はともあれ、今日は逆に大根が居ない静けさとのギャップが大
きすぎ、波限はかえって何もする気になれなかった。青一郎もあ
のままアルバイトに出かけたので、朝食を作るのも今日は休みにした。
勤労少年に対し己は公務員なので副業は出来ず、安月給でもアルバ
イトなどはない。

それでもそろそろ起きるかと思限は眼鏡を掛けて起き上がり、い
つものように布団をベランダへと出し、新聞を片手にインスタント
のコーヒーを淹れたその時、ピンポンとインターホンが鳴った。

——誰だ？

いつもなら覗き窓から確認するのだが、今日は大根がいない開放
感もあったのか、「押し売り」と新聞宗教勧誘はお断り——といつも
の文句をぶつぶつ言いながら、青年は何気なくドアを開けた。

それが平和な日曜日をぶち壊しにするとも知らないで。

そこに立っていたのは、色白美人の若い女性——であった。黒く長い髪に、スカートとジャケットとハイヒールは全て白で統一されていた。

……保険の勧誘？

最初にふとそう思い、適当に断りの言葉を言いドアを閉じようとしたが、その女の鋭い眼に見竦められ、波限は一瞬動きを止めてしまった。その隙について女は言った。

「……打木うちぎは何処だ？」

「は？」

聞いたことのない苗字に波限は間の抜けた声を出した。

自分の家は聖護院だし、隣は宮重だし、こっちの隣は……守口だし。アパートにそういう苗字の人でもいるのかと波限は思い、

「ウチは違いますか……」

と答えた。すると女はぎん！と波限を睨みつけると、無理矢理家の中へ入ろうとした。

「おい、貴様、隠し立てすると為にならんぞ！ 打木、居るんだろぅ！？ 出て来い、コノヤロー 出てこれないってことは、そんなあたしに後ろめたいことがあるのかい！？」

「——おい！」

——痴話喧嘩か何か！？とにかく人違いで不法侵入をされても困る。

相手が女であったのは、波限にとって幸いであつた。妙な迫力はあるものの、流石に力で負けることはないからだ。波限はとりあえず知らない女であつたが、鬼気迫る勢いの彼女の肩を押して言った。

「だからそんなヤツ知らんと言ってるだろーが！？」

「知らんとすればもつと問題だ！ 逆にアイツが知らんフリと言って隠しているのだつたら、貴様も同罪だぞ！？ その×××をハツカダイコンにしてくれるわー！！」

「……………」

その台詞の下品さ、にもであるが、その脅しが嘘ではないと思わせるほどの超越した何かを思わせる迫力――が再び女の瞳に宿り、波限は絶句させられた。

ちなみにハツカダイコンとはラディッシュのことであり、根が直径二、三センチ程度の楕円形で、大根の品種でも最小のものである……と言えばその小ささはお分かりであろう。……いくら同じ名前でもそればかりは男としては、嫌である。

それ以上に何よりも「大根」の一言に、彼は反応した。言われて見れば、「打木」という苗字もどこかで聞いたことがあったような気がした。

――まさか……。

「あんた、あの変なダイコンの……知り合いか？」

ヒールの高い靴のため、彼と五センチほどしか変わらないところにある切れ長の女の眼を見返して、波限は呟いた。

「――そうか。お前が打木に恩を売った聖護院かい」

女も合点がいったように呟いた。

――最初っからそー言えよ……！

遠距離（2）

苛立つてきた波限はこれも全部あの野郎の所為だと、心の中で源助大根を殴りたい気持ちにもなったが、とりあえずこの場を収めようと怒りを抑えて、突然現れた謎の美女の問いに素直に答えた。

「……アイツなら、いねえよ」

相手の態度が横柄なので、つい初対面でもつつけんだんな態度になつてしまう。

すると、「何!？」とその女の目がまた鋭く釣り上がった。

「だから隠し立てすると貴様の×××をハツカダイコンに——」

「だーっ！ 女が何度もそーゆーコトを言うな——」

穏やかな日曜となるところだったのに、朝からまたハイテンションに。やはり全てはあの大根の所為だ……無意識のうちに握られた波限の拳がふるふると震える。

「アイツなら今日、クニに帰るとか言つて出てったぞ！」

なんでもいいから帰って欲しいという切実な叫びに、謎の女はそこで急に黙ると波限の目をじいつと見つめた。何だよ、と彼も彼女を見返した。

「——本当に、居ないのかい？」

波限の真つ直ぐな視線に嘘は言っていないと感じたか、女はふつと眼光を緩めると言った。

「ああ」

「……そうか」

女はどこか残念そうにため息をついた。そして、

「折角こんな遠い所まで来たのにこのまま帰るのも癪だ。とりあえず、茶の一杯でも入れてやってくれ。喉も渴いたしねえ」

そう勝手なことを言つと、ハイヒールをばいばいと脱ぎ捨て波限の部屋へと上がり込んできた。

「おい！」

波限の静止の声もなんのその。彼女はさつさと男所帯の家に上がりこむと、「ふむ」と窓から下の大根畑を見下ろた。

傍若無人は大根畑の常識なのか、それとも大根だから人間の常識が通用しないのか……。何だか大根が嫌いになりそうになりながら、波限はため息をついてドアを閉めた。

・・・・・・・・・・

「いい畑じゃないか」

男所帯だが性格上、物をあまり置かないタイプのため、さほど散らかった感じのない殺風景な六畳一間に、まるでモデルのような体型の女が妙にくつろいで座っていた。

「どうも」

彼女にインスタントのコーヒーを出しながら波限はぼそりと答えた。そして自身も温くなったそれをようやく口にした。……くつろぎのひと時から一転してしまった味わいであるが。

「あのバカは元気でやってるかい」

言わずと知れた源助大根のことだろう。

「元氣も元氣じゃねえも……」

波限は何度目になるか分からない大きなため息をついた。彼女の前でもハイテンションなのか、女はけらけらと笑い出す。

「笑うなら引き取ってもらいてえところだが」

再びコーヒーを啜りながら波限は低く呟いた。

「それは出来ない相談だねえ。アイツには大根の普及に努めてもらわねばならないし、大根は根深く恩も深く、ってモンだからね」

女は頬杖をついてコーヒーカップを手に持つと、笑ってそう言った。その表情はこの状況を楽しんでいるかのように見えた。

「つつつか、あんたは人間なのか？」

見た目は人間の女だが、言うことが何処となく普通の人とはズレ

ている。喋る大根に出会ってから、波限自身のそういった感覚もずれ始めてきたので、今ようやくそう感じたのだが。彼は投げやりに身体を逸らすと、相手を胡散臭そうに見て尋ねた。

「さてね」

女は肩を竦めた。

「——まあ、アイツに命を吹き込んだのは、あたしだがね」
そしてどうでもよさそうに言葉を続けた。

——って！

波限はそこで目を見開いて女を見る。

——こいつが諸悪の根源……！？ えっと、何だっただけ？

「……スズシロ……」

源助がしょっちゅう口に使っていた、自分に命を与えたとかいう神だとか愛する女だとかいう名を、波限はどうにか思い出して搾り出した。

「よく知ってるじゃないかい」

女は切れ長の眼で数度瞬きをして波限を見た。

……確かに（性格はどうあれ）大根の言うとおり美人——じゃないくて！

「なん、……でこんなトコに居るんだよ？ アイツあんたに会えるって喜んで出かけて行っただろ！」

あの大根はそれを楽しみに出て行っただのに、これでは完全にすれ違いではないか。波限も思わず叫んでしまう。

源助の存在自体はいけ好かないものの、あれだけ清白に会えることを楽しみにしていたのだ。クニとやらに好きなだけ帰ってくれていてよいのだが、源助の性格上、大根と言えども惚れた女の手前、使命を果たすまでクニには帰れないという男気はあるらしく、彼女が居なくても波限への恩返しに無駄に責任を感じ、今日中に何が何でも戻ってくるのだらう。

「あたしだってそんなに長いこと向こうを離れられないよ。こんな空気の悪いところ、長く居たら倒れちまう。アイツも運がなかった

んだろう。此処に来たのもほんの気まぐれだしねえ」

「……」

それにしても、別にこの女に会いたくも無い波限がこうして相手をし、彼女に会いたくても会えない源助が此処に居ないことには、非常に無情なものを感じ、戻ってきた彼が落胆してやかましく騒ぐであろうことへの迷惑を差し引いても、同情せざるを得ない。

——縁がないって事なのか……。

想い人に会えない源助大根を流石に哀れに思いながら、二人がそう言うなら仕方ないかと波限は苦いコーヒーを飲み干した。

「それじゃあ、帰るか」

そう言う女——清白は、本当にコーヒーを一杯飲んだだけで立ち上がった。

「待つてやんねえのか？」

このわけのわからない女と一日中一緒に居るのは気を遣いそうだったので安堵はしているものの、やはり源助をどこか可哀想に思うお人よしの波限なのだ。

「元気なら、それでいいさ。先にも言ったがそう長くは此処の空気に触れていられないしねえ」

清白はふつと笑った。その笑顔は今までと違い、優しく切なげなものに見えた。

「悪いが聖護院、駅まで送ってくれ。このボロアパートは駅から遠すぎる。こんな距離歩いたら、空気が悪いから倒れちまうよ。こちら行き帰りの電車賃しか持っていないというのにさ」

そして唐突に彼に頼んできた。

「は？　じゃあ行きはどうやって此処まで来たんだよ」

「タクシーの運転手にキスマーク付の大根をくれてやったら連れて来てくれたぞ」

「……解った。送ってく」

少しの間の後に波限は引き受けた。ちなみにこのボロアパートが

安い所以であるのだが、最寄駅まで歩いて一時間近くも掛かるのであった。

そして駅までであるが、彼は一応部屋着から外出用のジーンズとＴシャツに着替えた。その正体が人間かどうかかなり怪しいが一応女性の前であるためズボンを脱ぐのは少々ためらわれたが、当人は構うことなく人間界の新聞など読んでいる。

狭いアパートには他に部屋もないので波限は居心地悪く彼女の目の前で着替えた後、波車の鍵を持ち、清白を促して外に出た。

そして彼は、突然の騒がしく非常識な来訪者に混乱していつすっかり周りを警戒することを忘れていた。

——期待している時には会えない、その存在をふと忘れていたり都合の悪い時には出会ってしまふ、人生とはそういうものである。

ガチャ、とドアを開け波限が清白と一歩外に出ると、丁度、隣人——の初夏がコンビニエンスストアの小さな袋を提げて歩いてきたところと鉢合わせてしまったのであった。

ちなみに、コンビニはアパートから徒歩五分のところにあるので便利である——なんてことはどうでもよく、

「……」

——しまった……！

何がしまった、なのか波限自身にも。ただ非常に焦りを感じた。

日曜の昼近く。男女が二人揃ってアパートから出てくれば、普通想像することはひとつ、だろう。

親類だとかなんとか苦しい言い訳も思い浮かぶが、そもそも初夏にどうして言い訳が必要なのか。

それに彼女に既に付き合っている男がいたり、彼女が微妙なアピールをしている隣の若い男のことを不審に思っているならば、こうして波限に相手がいると思わせることは寧ろ彼女にとっては安心出来るのではないか——。

狭い通路では引き返すことも出来ない。短い時間に様々なことを

考えてしまった波限が何も言えないでいる間にも、初夏は気まずい現場を目撃してしまつたとも言つように、ばつが悪そうに早足で通り過ぎると、俯いて会釈をだけをし二人の方を見ないで素早く部屋へと入つていった。

「行くぞ」

呆然と立ち竦む男の背中を軽くどつくと、清白はスタスタと先に歩いていき、ハイヒールの甲高い音を立てて階段を下りていった。

・・・・・・・・・・

貧乏であつても車は電車の便がよいこの地方都市では必要になるので、波限も持つていた。それに無言のまま清白を乗せる。既に見られてしまつたことには変わりないので、波限は約束どおり彼女を駅まで送つていくことにした。

元々不機嫌であつた彼が益々不機嫌な顔をしているのには、清白も気付いたらしい。その横顔をちらりと見ると、窓の外に目線移して言った。

「あれが『はつか』嬢かい。ハツカダイコンみたいに可愛い子じゃないか」

思わずハンドルに頭をぶつけそうになる。

「何で名前知つてんだよ……」

「打木の報告書に書いてあつた」

——何を報告してんだ！ あの大根は！！

思い切り心の中で突つ込みを入れながら、波限はふと思う。

——知つてんなら何とか誤魔化してくれよ……と。しかしそれはすぐに、違ふな、と彼の中で否定された。

確かに清白が人でないから、そういう気も回らないのは仕方がないというのもあるが、そもそも初夏に「誤解されたくない」ということは、即ち彼の中で「答え」が出ているということになるのだ。

誤解されたくないという答えであるならば、「自分で誤解を解け

「ばい」だけのことだし、そうでないならば「誤解されても問題はない」——そう、結局誰も関係ない。波限自身に戻ってくる問題なのである。

「怒っているのかい？」

清白は流石に自分が女の身なりをしていたことを思い出し、彼の想い人に自分とのかを誤解されたと思い当たったのか、波限に尋ねた。

「……怒ってねえよ」

その言葉に嘘はなかった。彼がもしも苛立っているとすれば、「自分に」——であろう。

其処まで察したかはわからないが、「ふーん」とだけ清白は答えた。そしてまた窓の外を見ながら呟く。

「打木からの報告書には、お前やお前の家族の誉め言葉ばかり書いてあったよ。……アイツも大概お人よしなところはあるけど、お前も相当だねえ。まあアイツが恩を感じて其処に居たいと決めたくらいだから、お前らもいいヤツらだろうとは思うが、この世知辛い世の中、下手すりゃ虐待されそうな大根だっているのさ」

誉められた気はあまりしない誉め言葉はさておき、「虐待」という不穏な言葉に、波限とてあの大根を何度折ってやろうかと思っただけ分らない、と思い出していた。

「でもお前は大事にしてやってるようだねえ」

それは今日会った彼の人柄と報告書の内容から、清白が判断したようであった。礼は言わなかったが、彼女はゆっくりとした言葉と穏やかな笑顔で嬉しそうにそう言った。

しかし運転中で前を見ている波限には清白の表情は伝わらず、彼は眉を寄せると不思議そうにこう答えた。

「——食べ物、大事にせんといかんだろ」

その瞬間、清白は大声で笑い出した。何だよ、と横目で彼女を睨

んだ波限に清白は非常に愉快そうに笑って答えた。

「あんたは、いい男だねえ」

……やはり馬鹿にされているかどうかわからないその言葉に、波限の眉は益々寄せられる。

その時であつた。

「あつ！」

突然清白が大きな声で叫んだ。

「何だ！？」

丁度赤信号で車が停まつたので急ブレーキにならずに助かつた。

「ちよつと！ あの蕎麦屋——寄ってくれ！ 『おしぼり蕎麦』やつてるじゃないかい！ 大根おろしは今のあたしの精力剤に丁度いいんだよ。寄ってくれなきゃお前の×××をハツカダイコ……」

「だー！ もういい！！」

遠距離（3）

……波限は、自分は押しに弱い方なんだろうなと思った（ナニソレをハツカダイコンにされるのだけは勘弁して欲しいというのもあるが）。勿論、余程法律や倫理に反していることは、どんなに頼み込まれても頑として頷く気はないものの。

結局、電車の時間は特に決まっていなかったので、その珍しい蕎麦を出しているという蕎麦屋で清白と昼飯を食べる羽目になってしまった波限。別に義理も何も無いこの女と、源助大根を差し置いて何をやっているのだろう……と、本日何度目になるか分からないため息をつき、車を降りる。

さて「おしぼり蕎麦」とは、信州信濃の東信地方で食べられる郷土料理であり、辛味が強く独特の下膨れな形をした「ねずみ大根」を卸した汁に、味噌とねぎなどの薬味を入れてそこに蕎麦をつけて食べる料理である——ちなみにうどんをつけて食べることもある。

それが何時間も離れたこの県で食べられるのは、主人がその出身なのかもしれないが、とりあえず大根おろしをクニへ帰るまでの精をつけたがつている清白の希望どおり食べさせることにした。

確かに昼飯の用意もなかったしあまりお目にかからない食べ物なので、味見をする価値はあるかと波限も思った。ただ蕎麦は値段の割に腹が一杯にならないのが難点であるが……。

辛い大根おろしと味噌の香ばしさの味のコントラストを何故か謎の女と楽しむ羽目になりながら、初夏に見られている以上、どうでもいいやという気持ちになり、波限は蕎麦をかき込んだ。

特にする会話もなく黙っていた二人であったが、先程の清白の言葉からふと疑問に思ったことがあり、波限は清白に尋ねた。

「他にもこんな風に恩返しするとかいうダイコンが居るのか？」

美しく優雅に、かつ豪快にずずと音を立てて蕎麦を啜っている目の前の女を見た。

「……やり方は、様々だけどね」

少し間を置いてから、清白は曖昧な答え方をした。

——ということはあんなに鬱陶しくなく、さりげなく恩を返す大根もいるのだろうか。だったらそっちをこちらに回して欲しい、と切に願ってしまう波限であつた。

しかしその言い方からすると逆にインターネット上で探せるほど、全国的に全く同じ境遇の奴がいるというわけでもないらしい。確かにそうだったら、もっと騒ぎになってるであろう。

そうは言っても一生大根が授けられるいうのも、それはそれでありがたいことである。ただ結婚や将来のことを考えると、あんな大根が家にいるのはどうか……やはり考えるのはやめようと、既に蕎麦を食べ終わっていた波限は半ば自棄くそに食後の蕎麦茶をぐびつと飲み干した。

「打木源助は、例外なのさ」

最後の蕎麦を口に運びながら、清白はぼつりと呟いた。

「？」

「ではお人よしの聖護院に、ひとつ御伽話を聞かせてやろうかね」

そこで彼女はそう言つて笑つと軽く口を拭い、同じく食後の蕎麦茶に口をつけると話し始めた。

「……昔々、旅の一座にひとりの男が居たのさ。それがまた大根役者でな、でも根もバカなもんだから、人に大根大根言われているうちに、『オレは大根役者じゃから』と笑つて大根ばかり食つていたんだと」

半分聞き流してはいたが、波限は黙つて女の話聞いていた。

「それで——更に古の物語で、大根が大事に食つてくれた者の元へと現れた、というアレさ」

——徒然草の第六十八段だとかいうものだ。もう鬱陶しいほど寝物語にあの大根から何度も読んで聞かされ、覚えたくも無いのに覚えてしまった。

「その大根役者が、恋をした女形の役を演じることになってな、恋などしたことない上に女の気持ちなどわからんと悩みばやいている男の為に、大根同士で話をした結果、一本の大根が女の姿になってその男の前に恋人になってくれと現れたのさ」

——なんだその「まんが日本むかしば・し」ちつくな展開は！？
嘘か誠か……九割方嘘だろう、しかし自分の家に喋る大根がいるのは現実だ、と胡散臭そうな目をしながらも波限は清白の話の続きを聞いていた。

「男も寂しかったのか、本気でその女に惚れてしまった。女——もとい大根も、バカだけど一途な男を前から好ましく思っていた訳だから、それを受け入れた。そして二人は結ばれたのだが、自分が大根であることを秘密にしていた女は、段々苦しくなってきたのさ」

清白は蕎麦茶のお替りを自分で注ぎ、波限の湯飲みにも注いだ。

「だけどそうして恋を知った男は女形として大成功を収め、これでもうヤツを大根役者などと呼ぶ者は居なくなった。大根の恩返しも果たされ、これが潮時と女は自分が大根で恩を返しに来たのだと正直に男に話した。ところがどっこい、男はバカだもんだから、それでもいいから側に居て欲しいと言ってきた」

大根と恋をする男——。よくよく考えると不毛であるし、自分だったら御免被りたい話であるが、世の中には色々な嗜好のヤツもいるのだろう、と波限はもう一度薄くなつた蕎麦茶を入れると啜った。
「それで女は男の望みどおり大根の仲間の力を借り、そのまま人間の姿のままで居続けた。だけど男は人間だから——、それから何年かの後、流行病であっけなく死んだのさ」

清白は頬杖をつくと、何処か遠くを見るような眼で外を見た。

「それから何十年も、何百年も経って……、大根を愛し続けたその男の魂は、一本の大根の中に入ったとさ。お終い」

「……」

波限はそこで掌を上げた清白を見た。

「……そんでその女はどうなったんだよ」

——まさかな、と思いながら波限は問い掛けた。

「さてね」

清白はにんまりと笑った。

「……」

「『聞かなきゃよかった』って顔してるぞ」

清白はそう言ってお人よしの彼を指さして笑うと、伝票も一緒に渡して立ち上がりながら言った。

「ただの御伽話だって、言っただろう？」

……蕎麦は腹が一杯にならない。大盛を注文しても腹七分目であり、二人合わせた昼食代が二千三百円とはこの不味い話を聞かされたことを合わせると、更に割に合わない金額だ、と波限は心から思った。

そして約束どおり駅までこのトラブルメーカーの女版を連れて行き、ようやくこれで別れられるかと波限は肩の荷が下りた気分になっていた。まだ源助の方がオス（？）なだけ扱い易い……と改めて感じていた。

「世話になったねえ」

駅のロータリーで清白はそう言っていると車を降りた。

「あのバカに伝えることとかねえのかよ」

聞くほどのことでもなかったが、結局彼女が何をしに来たのか——。女の気持ち波限には解せなかったのだった。

「……元気なら、それでいいのさ」

清白はもう一度そう言っていると、今度は先程の昔話をした時と同じ表情を浮かべた。そして最後に、

「お前も頑張りなよ。その立派な赤首大根ではつか嬢をメロメ」

「だーから、そういう下品なことを言うなとゆーとろーが！」

人間でないからか、その綺麗な外見も台無しなデリカシーのない言葉ばかりを吐き捨てる美女を最後まで怒鳴りつけると、波限の車

は走り去っていった。それを手を振って見送りながら、清白はぽつりと呟いた。

「でもあの男はあんな変な方言は使わなかったけどねえ……」

——どこでどう間違ったのやら。

・・・・・・・・・・・・・・・・

そして夕食後——。案の定というか、源助大根は生き生きとしていた出発時と正反対に、白い体を買っ青にしてふらふらと足取りも覚束なく帰ってきた。

「どーしたんですか!？」

青一郎が心配して出迎え、波限は予測がついていたものの、一応黙っていた——が、

「種はぎようさん貰えたし、ダチにも会えた……けど、清白様には会えなんだー!!」

そしてそのまま青一郎に抱きつきとおいおいと泣き出してしまった。
「今日たまたま、ワシの様子を見に、聖護院の家に行かはったんやとー! すれ違いラブやー!!」

やはり誰かから聞いたらしい。はあ、と波限はため息をついた。

「そーなんですか!？ なぎささん」

青一郎の問い掛けに、波限は短く「ああ」と答えた。

「じゃあ、すずしろさんに会ったんだー。いいなー。やつぱ美人さんでしたかー?」

その問いにNOなどと言おうものならば、このやさぐれた大根にどんな攻撃を喰らうかわからない——のもあって、
「……………まあな」

長い沈黙の果てに波限はとりあえずそう答えた。

——性格は、さておき、だが。

その間は、一体? すずしろさんとの間に何かあったのかなー? と青一郎は察し良く思ったが、彼がその疑問を口にするよりも早

く、源助が今度は波限へと抱きついてきた。

「そーやろー、そーやろー！ 清白様の美しさに敵うモノはないんやー！ 会いたかったわー！ 清白様ー！！」

肩の上でおいおいと泣き叫ぶ大根に対し、そのお陰でこちらは大変な目にあつたんだがな、と波限は大きな大きなため息をつきながら言つた。

「……でも、お前が元気ならそれでいいって言つてたぞ、その女」
「ほーか……！ ほーか、ワシのコト、心配して……清白様ー！！」

波限にはあの女の意図はまるで分からなかったが、彼には彼女の気持ちが伝わつたのだろうか、それとも都合のいいように解釈しているだけのだろうか、源助は感動と寂しさで益々大声で泣き出した。

その大騒ぎに波限は困り果てながら、もしかしてあの女は源助が向こうへ行くことを知っていて、こうなることも知っていて、あえてすれ違わせたのではないか……あの捻くれた女ならやりかねえな……、とこつそりと思い、思わず恨めしいような気持ちになつていた。

……

そして夜も更け、暗い部屋の中で、男一人と大根一本は、今日一日の出来事にショックと共にどつと気が疲れ、呆然と倒れるように横になつていた。

波限は、今日初夏に目撃されたことへの結論を出していた。――改めて考えてみても、普通隣に住んでいるだけの男とどうこうなりたいなどとは思わないだろう。だからやはり誤解など解く必要はないのではないだろうか、と。

逆に誤解されると困る、と彼が焦ってしまったのは、「女が居ると思われたら、初夏が自分への興味を失うかもしれない」という打

算が働いたからではないだろうか。

——なんでこんなに、ただの隣人が気になるのか。相手がどういう女かもわからないというのに。愛想笑いの顔しか思い浮かばないのに——たとえそれに癒されたのが事実であつても。

きつと話したこともないからだ。だから下らない妄想ばかりが余計に募ってしまうのだ。……これじゃストーカーと変わらねえじゃねーか……。

自分でももどかしいとは思いつながら、だが相手を不安や不快な思いにさせることも嫌でどうすることも出来ず、眠れない波限が無意味に寝返りを打った時、いつもなら熟睡している筈の大根も今日は眠れないのか波限を起こさないように黙ってそつと立ち上がる。そして静かに窓を開け、ベランダへとよじ登り大根畑に昇る月を見上げて、物思いに耽り始めた。

思わず自殺でもするのではないかと波限も目で追つてしまったのだが、眼鏡を外しているのばやけてはいるが、大人しく座っている姿が確認できた。

するとその源助の姿が——ふと長い髪を後ろで軽く結わえ、派手な着物を羽織った男の姿に見え、波限は思わず目を擦った。

疲れているのか、眼が悪いからか、それとも昼間の話の印象が強過ぎたのか。しかしその幻影は一瞬で消え、其処には唯の考える大根が存在していた。

波限は再び暗い天井を見上げた。

昼間、清白から聞いた昔話は源助にはまだ話していない。もしかしたら彼は知っているのかもしれないし、彼女があえて言わないのかもしれない。だが自分などに言ったということは、秘密にしないではいけないことでもないのかもしれない——が、もし彼がその話を知らないとすれば、それこそ彼女の口から言すべきことなのだろう、と波限は思った。

——たった壁一枚なのに、遠い距離。

——会いたくても次いつ会えるのかわからない、遠い距離。

二つの空しい想いが月の夜をたゆたっていた……。

……ただ幸せに、元気で居てくれさえすればいい。それだけで自分
は幸せになれるという気持ち。

遠い空から彼方を思う。

壁（１）

「そーいえば、再来週の水曜午後四時から三者面談なんですけど、お仕事抜けられそうですか？」

午後十時過ぎ。風呂上りの青一郎が麦茶を片手に思い出したように、扇風機に当たりながらテレビの報道番組を見ていた波限に言った。風呂も立て続けに入った方がガス代も掛からないので、掃除も楽であるし波限の家で入っている。

波限は青一郎の修学旅行のお土産のもみじまんじゅうに手を伸ばしながら、「解った。なんとかする」と頷いた。

「ちゃんとしてうところは『保護者』しとるんやなー」

一番最後に風呂に入った源助大根が、ほかほかと湯気を立てながら葉っぱを手ぬぐいで拭きつつ感心したようにそう言った。

どうでもいいけど、どうして大根が三者面談なるものを知っているのか、そして毎日風呂に入っていて腐らないのか（でも入らないと臭そうだ……）などと相変わらず謎に包まれているが、いちいち突っ込むのも疲れるので、既にそこは誰も何も言わない。

「なにぶん、未成年ですからねえ」

青一郎はいつもと同じ呑気そうな笑みを浮かべた。波限は何も言わずに甘いもみじまんじゅうを口に放り込んだ。

前述のとおり、波限は最終的に青一郎の母親に成人まで面倒看てもらった以上、今度は自分がこの少年を成人まで面倒看るつもりであった。それ以上でも以下でもない関係。遠い親戚であるらしいが血の繋がりの薄く、その先はどういう関係になるのか全くわからない。兄弟でも友達でもない、変な二人——なのである。

そこで青一郎は更に面白いことを思い出したと言うように手を打った。

「三者面談と言えば、」

ほうほうと源助がちゃぶ台から身を乗り出す。

「前回の三者面談にもなぎささんに来ていただいたんですけど、ク
ラスの女子がかっこいいーって言っていましたよー」

「ほんまかー？ 女子高校生にウケ良えなんて、本望やないか、な
あ。つつつかその子の趣味がオカシイだけかもしれないけどな」

歯でも磨くか明日も早いし……と、波限は二人の話を無視して、
洗濯機の置いてある風呂場の隣の洗面台へとその場を立った。と言
つても六畳一間の家の中、会話など丸聞こえである。

「んーとね、その日会った子……七人？中三人……あれ？ 二人か
な？ が、そー言っていましたよー」

「……リアルな数字やなー」

「あとは怖いとか」

「聖護院、ちいとも笑わへんでなー。宮重の愛想のよさの三十分の
一でもあればえーのに。つつつか、一日に七人の女子に囲まれとる
宮重の甲斐性のがすごいけどな」

あはははーと青一郎はまた呑気な笑みを見せる。

しゃこしゃこと歯を磨きながら、最初うるせえよと思っていた波
限も最後の源助の言葉にはまっただ、と心の中で頷く。一体この
子はどついう大人になるのだろうか……。まあ愛想の良さは母親譲
りだろうが。

でもあの母親は決して上辺だけの愛想は振りまいてはいなかった
から、それはきつとこの少年も同じで、だからこそ人に好かれるの
だろう。第一愛嬌はある方が、当然、好感は持たれるだろう。

この少年、見てくれは純心無垢で無害そうだし隣の彼女も、実は
こつちのが……と、波限がとりとめもなく思わずぼんやりと考えて
しまった時、

「とゆーワケで、自信持ってがんばってくださいね！ なぎささん」
彼の考えていたことがわかったかのように、突然話を振られ、波限
は口をゆすがずにそのまま飲み込みそうになってしまった。そして
咽ながら口を流し、「何がだよ」という渋い顔をして部屋に戻りな

がら（他に帰るところがないからだ）、

「頑張りようもねえよ……」

とぼつりと呟いた。その瞬間、

「「ええー！！！」」

二人分のどよめきが彼を襲う。

「そんな！　なんで告白する前から逃げ腰なんですか！」

「そーやぞ！　も、もしかしたら寡黙なオトコが好きかもしれないか。ワシなんか見てみい！　目も鼻も口もないけど清白様と結ばれる日を夢見とるぞ！」

人のことを散々言った癖に今更何を、という感じである。

告白だなんてそれこそコーコーセーみてえなことこの歳で出来るか！　とか、スズシロって、あの女の所為でこの前どんな恥ずかしい目に遭ったか……つうか結ばれるってお前そのナリで何処までやる気だetc突っ込みたいことは山のようにあるが、波限はもう言い返す気力も無くなり、少々早いが、

「もーいい。寝る。退け」

むつつりした顔で言う、ときばきとちやぶ台を片付け、自分の布団を引き、早々とその中に潜ってしまった。

「それこそ小学生じゃないんだからー」

布団の向こうで青一郎の声が聞こえるが、波限は完全に無視を決め込んだ。

.....

仕方がないので、青一郎と源助は波限の部屋の明かりを消して、青一郎の部屋へともみじまんじゅうを持って移動した。ちなみに明日は土曜日で学校は休みであるが、波限は珍しく朝早くから出勤らしい。

「如何ともしがたいカタブツやなー」

春撒き大根が無事に収穫され、夏に植える秋撒大根の撒種までも少々時間があるので、はつきり言って暇である大根は、恩人の恋をそろそろ本腰入れてなんとかしようとお節介にも悩んでいた。

「前の彼女は積極的な人だったんでしょね」

今思えばよく彼女がいたな、と青一郎ですら思う。まあ、見てくれ身長、年収職業、嫁姑問題 e t c …… と条件的には悪くないため、まあとりあえず落としてみたくなる女もいるかもしれない、と彼は大人びた分析をしていた。

「一体、どうしたら……」

「いいんでしょうね……」

日頃は滅茶苦茶言うものの、二人とも不器用で真面目な波限が大好きなのである。彼の幸せを願う二人は、腕を組んで真剣にううーん考える。

「さっきの話やないけど、聖護院も宮重みたいにもーちよい愛想があつたらなー。サービス業のクセに、仕事どないしとるんやろな……」

ぼやく源助に青一郎も自分用のテーブルに頬杖をつくとき、そうだねえと呟いた。

「昔からなぎささんは笑わない人ですからねー」

そこで青一郎は、物心ついた時にはもう既に自分の家に居た少年——波限のことを思い出してみたが、喜色満面の笑顔をしているような思い出はやはり見つからなかった。

だけど子供心に彼は、そんな無愛想な波限少年が大好きだった。仕事の忙しい母親に代わって自分の面倒を看ていてくれていた波限のことは、きつと父親が居なかったから余計に兄のように慕っていたのだらう。

青一郎も母親に聞いたのだが、波限に実の両親の記憶は殆どないらしい。親戚の家を転々として、最終的に宮重の家に引き取られたと言う話だ。だから一体いつから彼が笑わなくなったのか、青一郎

は知らない。だが表情は乏しくとも快不快は表現していたし、気持ちの真つ直ぐで優しい少年だったので何も不安に思うことはなく、頼れる存在だと思っていた。

——ただ……。

どこか遠い目をして青一郎はぽつりと言った。

「おれが知ってるあの人はもう中学とか高校生だったから、そりゃ子供みたいに泣いたり笑ったりはしないけれど……あの人ね、おれの、かーちゃんが死んだ時も、泣かなかったんだよ」

「……？」

源助は首（などないけど胴体の真ん中より少し上）を傾げて青一郎を見た。

その時波限はもう大人だったから、青一郎の母親が身体を壊して亡くなったことに対し、「自分がこの家に来た所為で、彼女は余分に働いて身体を壊してしまっただろうか」とは思っても決してそれを口にしなかった。

青一郎はまだ中学生だったものの、彼が本当はそう思っていたことは何処となく分かっていた。だがそれに対して、どう言ったらいいか分からなかったのだ。

母親との別れは辛かったが、波限を恨もうとは少しも思わなかった。

しかし彼にどう声を掛けたいのか、中学生の青一郎は自分の悲しみに精一杯で分らない。だがその答えのように、今の生活が自然に始まっていた。

それは何処かで吐き出したかった、青一郎の中の子供心に切なかった思い出。

「だからね、」

青一郎はまたのんびりと笑った。

「前の彼女さんは出来なかったんだろうけど、いつかあの人を心から笑わせたり、泣かせたりする人が現れるといいなーって思ってたつかさんはそれくらい強くて優しい人かはわからないけれど、そ

れでも何かあの人の心を動かしたんだな、って嬉しかった。あの人もそうやって動かされるような心が残ってたってことだね。だから、それが『本物』になればいいな―って、おれは思ってるんですけど」

誰にも言えなかった気持ち、それこそ大根という存在だからこそ話せたのである。いつものように穏やかに何かを思い出しながらゆっくりと話していた青一郎がふと前を見ると、源助が体中の水分を噴出させ、大泣きしていた。

「ど、どーしたんですか！？ 源さんっっ」

「なんっ、て切ない話やー！ ワシがなんとしてでも宮重と聖護院の悲願である、はつか嬢との恋、成就してやるでなー！！」

「源さんー！！」

夜更けに大根と抱き合って泣く男子高校生―という、よくわからない光景がアブラナ荘の一室では繰り返されていた。

壁（２）

……一体、何の話をしとるんだ……！

普段の話し声はよく聞こえないものの、薄い壁一枚だ。源助のよく通る声は静かにしていれば、少し大きいだけで隣の波限の部屋まで聞こえてくる。

波限には青一郎の話声は聞こえず、最後の源助の台詞だけが丸聞こえだった。

——何が恋だか……いい歳こいて。

頑張るとか頑張らないとか、もうどうでもいい。余程の奇跡でも起こらん限り初夏とどうこうなるなどもう無理だろう。

別に隣に住んでるだけ。ただそれだけなのだから、最初から無かったと同じことなのだ。無かったことにすればいい。諦めることに慣れていく。

今思えば、波限は自分の居場所を作るために必死であつた。一番長く世話になり優しくしてくれた青一郎の母親にこれから孝行をしようと思つていたところ、それは果たされなかった。だから今は、彼女の望みでもある青一郎だけはまっとうな大人にすることを第一に、彼の自立を促しながらも、進学に必要な環境と未成年に出来ないことには力になるうと思つていく。

その先は……おそらくまた一人に戻つて、今ならもう社会的にも居場所はあるし、明日リストラされるような職場でもないから、ただ好きなように生活していただけたらう。

波限にも三大欲求は普通にあつた。そして自分という存在を求められることはたとえ仮初のものでも錯覚であつても嬉しかったので、女性と交際をしたこともある。ただその理由だけでは相手の欲求とそりが合わず、互いの気持ち冷め、あっさりと別れを迎えてしまったのだが。

それから間もなく青一郎の母親が死に、彼が此処に来て毎日の生

活に追われているうちに、わざわざ異性とそういう付き合いを持つことが面倒になって遠ざかっていた。

——なのに、あの笑顔に惹かれた理由は何だったのか。

ただ単に久々に女を抱きたかっただけか、それとも本当は癒されたかったのか、寂しかったのか。

無かったことにしようと、波限も忘れようとするのだが、すればするほど、鬱陶しいほどにしようとやかな笑顔は脳裏にちらつく。

だがこのような古く狭いアパートに、一生住むことはお互い絶対にはないだろう。だからきつといつか離れることになり、こんな想いも時間が解決する筈だ——波限はそう信じていた。

そんなことを考えていた彼は、眠れずに布団の中で闇を睨んでいた。しかしやはり眠れないので、起き上がると眼鏡を掛けて梅雨の合間の晴れた月の夜、ベランダの外に出た。

煙草は随分前に止めたが、こういう気分の時には吸いたくなってくるものだ。

夕方まで雨が降っていたので空には黒い雲もまだ残っているものの、天頂に浮かぼうとする大きな月が裏庭の実のつき始めたナスとトマトを照らし、水溜りが月の光を反射していた。

隣の青一郎の部屋には明かりが灯り、まだ二人は話をしているらしい。大根と話が弾む男子高校生……やはり彼はどんな大人になるのだろうかと未恐ろしくなる。だが青一郎はとにかく交友関係が広いし、男女共に好かれているようなので将来を心配するようなこともないだろう、と安心して見てもいる。

そこで波限は反対側の隣の部屋を何気なく——と言っても少々意識して、見る。

その部屋はまだ明かりが点いていた。

——まあまだ十一時前だしな。

波限は月のクレーターをぼんやり見ながら、あれはやっぱりウサ

ギには見えないつつつか、エビだかカニだかに見えるとか、夏休みの一研究をしていた小学生の青一郎に聞かされたような事を、ふと思いついていた。

すると前触れもなく、隣の初夏の家の窓がカラカラと開く音が聞こえた。

隣の部屋とはベランダは一続きではなく、離れている。なので覗き込まなくても、横を向くだけでそれは確認できた。其処から女がひとり、顔を出した。

「――」
見てはいけない、と思ったが思わず見てしまう。

初夏はいつものように髪の毛を下で二つに分けて縛っておらず、風呂上りなのか肩までの長さの下ろした髪の下に、タオルを掛けていた。部屋着のＴシャツ姿のようである。雨が降っていないか確認でもしているかのように夜空を見上げた。そこで波限の視線に気付いた彼女は振り向いてしまった。

――あ、やばい。

覗きと間違えられたらいかんと思った波限は、自分も天気でも見たかったとでも言うように空々しく下や上を見た後、そそくさと部屋へ入っていった。

「こんばんは」、とでも言おうとしたのだろうか。彼女の口が少し動いた気がしたが、それ以上見続けることも出来なかった。逆に今度はカラカラと窓が開き、閉まっていく音の方を初夏が見送っていた。

――たった壁一枚なのに、なにひとつ声が掛けられない、遠い距離。
そう思ったのはどちらだったのか。

部屋の中に入った波限は、思わずそのまま床に座り込んだ。

ぐしゃりと髪をかき上げる。大根や青一郎が居なくてよかった、と心から思った。彼は自分でも、とても複雑で赤い顔をしていることが分かるからだ。

……コーコーセーじゃ、あるまいに……。なんなんだ、この純情は。

本当は出てこないかと期待していたのだ。それが叶い、高鳴った胸。単純に嬉しかった——それらの一連の心の流れから、彼は遂に見たなくても「答え」が見えてしまったのだ。

そこからずっと逃げ続けていたが、こんなふとしたことで、それを「自覚」してしまった。そしてその答えは理屈を並べ続けていた割には、呆気ないほど簡単にシンプルなものだった。

——無しにしようと思ったばかりなのに。

どうにかしようと思っただけでどうにか出来たら、苦労はしない気持ち。こういうものは自分で認めたら、多分最後なのだ。妄執に取り付かれる。

こんな嘘みたいなただの憧れが、現実になっちゃってしまうことが波限は悔しかった。つまらない事に心惑わされたくもない、と思いつけていたからだ。

梅雨の夜。仄かな恋心に気付いた一人の青年は、こんな感情も時間が経てば消え去ってくれるだろうかと——と、まだ逃げ続けることを考えていた。

.....

しかし波限が気持ちを自覚して認めたからと言って、何の状況が変わるわけでもない。

会いたくても会える相手でもなく、顔が見られるわけでも声を聞けるわけでも、ましてや触れることなんて叶いやしない。波限はただ普通に、いつもと変わらない日々を過ごすだけだった。

最近、暑くなってきたので聖護院及び宮重家では何にでも大根お

ろしを混ぜることが流行っている。大根に豊富に含まれる消化酵素は熱に弱いので、生のまま食すといいのだ。揚げ物や焼き魚に掛けてさっぱりいただくのも、おつなものである。

三者面談も無事に終わった——と言っても青一郎は学校での態度も成績も非常によろしいので常に何も問題はなかったのだが、七月初旬の日曜日の夕方、今日は波限が食事当番であるので、彼は力を込めて大根おろしをごしゅごしゅと磨っていた。ちなみに辛いほうが好きなので末端を使っている。

夕焼けの光が差し込む六畳間で、大根おろしとあえる唐揚げの下準備を終えた源助が、とてとて、と大根を卸す波限に近づいてきた。

「——なあ、」

本人は青一郎の居ない時でなおかつ何気ないことを装えるように、夕食の準備の時間を狙って言ったようだった。

「……前の彼女の前では笑うてたん？」

唐突な源助の質問に、波限は勢い余って大根をおろし金からはみ出させてしまった。

ちゃぶ台に大根おろしが飛び散り、勿体ないとティッシュで片付ける。

「覚えてねえよ」

——なんで今更そんな昔の話を。この前言ってた愛想がない云々の話の続きだろうか。

確かに無理に笑っても変な顔になるだけだから、愛想笑いはいしな一方がましだと彼は思っているが、それが災いして誤解されることはいつものことだ。

源助は「ふうん」と特に答えを求めていなかったように頷くと、少し間を置いた後に、核心に触れるべく重い口を開いた。

「氣い悪くしたら堪忍な」

珍しく気を遣う大根の言葉に波限は思わず手を止めて彼を見た。今は暇な時期だからお節介を焼くことにパワーが向かっている、と

言えばそれまでであつたが、源助には青一郎とこの前の話をしてからどこか引つかかつていた。人の心に土足で踏み入ることは大根の流儀に反するが、人の幸せを情厚く誰よりも願うのも大根だ。

——聖護院が心から幸せになる為には、「この部分」を解決しないことには無理なような気がする。きつとマイラバーの清白様でも同じ考えに至るだろう、そう思つた源助は真面目な口調で語り掛ける。

「あんなあ、嫌なこと思い出させて悪いけど……宮重から聞いたんやけどなあ、宮重のかーちゃん死んだ時、聖護院、泣かへんかつたんやて？」

その途端源助の予想どおりに、青年は何で今頃、しかもお前が、と言つような何とも言えない表情をした。だが意外に怒つたりはしなかつた。源助の尋ね方が遠慮がちであつたので、なんで彼がそんな質問をしたのかの答えを待っているようであつた。

源助は青一郎の話から感じた違和感を素直に伝えた。

「オトコはな、本当に好きな女と自分の親とか家族が死んだ時は泣いてもええんやってワシは習つたで」

——じゃあテメエは何なんだよ、と感情豊かな大根を見て波限は今度こそ突つ込もうかと口を開きかけた。しかし、心配そうに自分を覗き込む——これも目に見える表情がなくなるとも分かるようになってしまったのだが——大根の様子と、先程の「笑つたことはあるのか？」の質問から、彼が何を聞きたいのか、言おうとしているのか波限は察した。

それはきつと、源助にその話をしてしまった青一郎も同じ気持ちなのだろう、と。もう二度とあの日のことは話題に上ることもないだろうが、どこかで未だに青一郎も気にしているのだろう。子供にそんな風に気を遣わせていることを、波限も悪いとは思っているのだが。

だから怒ることも突つ込むこともなく、波限は源助の疑問に答えた。

「……別に、『家族』じゃないと思っているわけじゃない、あの人も俺にそう呼ばせてくれた」

——けれど。

波限はその先を言わなかった。

言わなかったのはわざと言わなかったのではなく、言う言葉が見つからなかったのだ。

言う言葉がどうしても見つからず、どんな言葉で表せばよいのかも分からず、その代弁として、そんな自分への嘲笑もきつと含めて、波限はただ静かに、微かに——笑ったような、顔をした。

それはきつと『あの時』も同じで——。

源助は更に青一郎から聞いた話を思い出していた。その現場を見ていなかったが、流石に彼にも分かった。

青一郎はこう言った。

——葬儀はひっそりと二人だけで行った。青一郎が波限に母の突然の死を知らせた時も、彼が病院に駆けつけた時も、通夜の時も、火葬の時も、骨を拾う時も……彼は一滴の涙も流さなかった。その帰り道、青一郎は何度流したか分からない涙を拭い、鼻水を啜りながら目の前を歩く波限の広い背中を見ていたが、それはいつもと変わらない頼りがいのあるもので、勿論辛い表情はしていたもののやはり涙は見せなかった。

別に咎めるつもりもなかった。ふと疑問に思っただけだった。いや、八つ当たりかもしれない。そして自分に感情をぶつけてくれない、この最後に残った「家族」に苛立っていたのかも知れなかった。

ひとつだけ分かるのは、自分が子供だったということだ、と青一郎は源助に苦笑して言った。

まだ中学生だった青一郎が波限の背中に投げかけた言葉は——、
『……泣かないんだね』
と一言。

その言葉に彼は青一郎を振り向いた。

そして静かに、だけど決して愉快だからではなく、それは泣いているのと変わらないような表情で、いやそれ以上に彼自身を責めて詰っているような何とも言えない切ない顔で、波限は微かに――笑った。

他人の気持ちなど、誰にも分からない。

青一郎の気持ちが波限には分からないように、青一郎も波限の気持ちも、傷の深さも分からない。

……だけどきつとその時の笑顔と今のこの笑顔は似ているんだろ
うな、と源助は思った。

流石のお喋りな源助も軽々しい言葉は口に出来なかった。

そして、青一郎は苦笑したままこうも言った。

『でもね、あんな笑顔だけは、もう二度と見たくないんですよ』

――うん、分かるで。ワシも一緒や。

その後、気まづくなった二人の会話は途切れ、大根おろしを磨る音だけが夕暮れの部屋に響いていた。

青一郎が帰ってくる頃には、いつもの家の様子に戻っていたが、この時源助大根は、あることを決意したのであった。

壁（3）

それから数日後の波限が風呂に入っている隙に、源助は青一郎に相談を持ちかけた。

「ええっ!？」

思わず叫んだ青一郎の口を源助は根で塞いだ。

「ちよお待て! 声がデカイ!」

「で、でも本当にやるんですか……?」

青一郎は声を潜めた。

「男一発、一世一代の賭けや! あの男もよう動けんやつちゃ。でも今こんなご時勢やで、相手は女性の一人暮らし、慎重になる気持ちも分からんでもない。——そこで人畜無害なダイコンであるワシの出番つてワケや!」

源助は胸をえへんと張つて見せた。

「それであの子がフリーやつて証明できれば、聖護院も一歩踏み出せるかもしれんやろ? ワシは恩を返したいだけなんや。あのオトコも見とつてもどかしいし、幸せにしてやりたいんや」

源助はばたばたと暴れ、青一郎はうーんと考えた。

確かに自分が動いても、逆効果になりそうだ、と彼も思った。波限は高校生に売り込ませているなんて痛いと思はれるし、逆に自分が彼女のことを好きだと勘違いされても困るのだ。もちろん初夏は可愛いとは思うが、波限が好感を持っているからこそ良く見えるだけの話である。

そう、彼に幸せになってもらいたいと願うのは、源助と同じ理由で——いやそれ以上に深い思いから、青一郎も同じなのである。

「——わかりました」

バレたら大目玉を食らうであろうことは、二人とも分かっている。こんな覗き行為と同様な手段、あの生真面目な彼が許すはずがない。それでも優しい一面のある波限のこと、どれほど怒っても絶縁す

るというほどまでには至らないだろうという甘えも何処かにあった。多分、ではあるが……。

ことが露見した時のことを想像しその恐怖にぞくりともする二人であったが、源助の提案である男一世一代の大きな賭けに、青一郎も波限に隣の佳人を振り向かせる最大のチャンスと乗ることにしたのであった。

・・・・・・・・・・

そして更にその数日後の七月半ばのことだった。

夕方五時。今日は初夏も仕事が進みであったが、平日なのもあり特に誰かと出かけることもなく、近所への買い物や家事や趣味——と言っても本屋や図書館で入手した本を読んだり、インターネットで好きなサイトを見たりなど非常にインドアな内容であったが、それらをのんびりと楽しんだ後、夕食は何にしようかと、一人暮らしの彼女はぼんやりと考えていたところであった。

そこで、ピンポンとインターホンが鳴った。

——誰だろう？

覗き窓から確認したが、誰も居ない。少々不気味な感じがしたので、彼女は一旦部屋に戻った。

しばらくしても何の音もしない。また不思議に思い覗き窓を覗く。やはり誰も居ないようだ。そして思い切ってチェーンをつけたまま、初夏はドアをそつと開け注意深く見回してみたが、それでも人の姿は見当たらなかった。

すると、

「？」

ドアに何かが軽く当たった気がして初夏はそのままチェーンを外してドアを開けると、足元を見た。

其処にはなんと、リボンの付けられた大根が一本、転がっていたのだった……。

初夏はきょとんとして、それを拾い上げる。

「おとなりの、かたから……？」

そして思わず隣のドアを見ながら、ぽつりと呟いた。

隣に住んでいる青年とその弟のような少年が、一生懸命大根を育てているのは彼女も知っている。一度、まだ小さくて柔らかい大根菜をもらったことがあったため、もしかしてまた彼がくれたのではないかと思ったのであった。でも大家の老人もごくたまに野菜をくれるので、違うかもしれない、と彼女は首を傾げる。

——でもリボンが掛けられてるし、やっぱりプレゼントなのかな……。でもこんな時間にお隣のおにーさん、家にいたっけ？

彼は真面目な人のようで、あの笑顔の可愛く人懐っこい高校生曰く、夕食を作るために毎日早く帰ってきているようであるが、まだ帰宅には早いような気がし、アパートの薄い壁からは帰ってきた気配も感じられない。しかしあの無愛想な様子からすると、こんな風に家の前に置いておくというのは考えられる。隣に確かめにいこうかとも思ったが、勘違いだと恥ずかしいし勇気が出ない。

玄関で大根を抱えたまま初夏はそのようなことを延々と考え、じーっと大根を見つめていたが、何故かそれが赤くなってきたような気がしてきた。

——夕暮れが映ってるのかな？

その大根を回転させて色々調べてみたが、最終的に何処をどう見ても大根だし爆発もしないだろうし、怪しい請求も来ないと思うし、何より食べ物は大事にしなくてはいけないし……と判断し、彼女はそれを持って家の中に入っていったのだった。

見つめられて照れていたその大根が心の中でガッツポーズをし、そして喋り出したいのを懸命に堪え、これからのことを考え緊張していたことなど、初夏は知る由もなかった。

かくして、源助大根は波限の想い人である守口初夏嬢の家へと潜入することに成功したのであった。

.....

「誰からもらったものかわからないし……。まだ食べないほうがいいよねえ……」

一人暮らしは独り言が多くなる。聖護院もたまに言うような、と源助は初夏の言葉を聞いて思っていた。ちなみに眼がないので瞑る必要もなく、彼にはしつかりあらゆる光景が見えている。

そんなわけで彼は台所の隅に置かれたが、六畳一間の部屋と繋がっている、そちらの様子も覗き見ることが出来た。

——明日、お隣のおにーさんが、あの高校生君に会えたら聞いてみようかなあ……。

それはそれで勇気が要るけれど。もういつそ大家さんからだったら……。それはそれで気が楽なような、残念なような……。

しかし初夏が悩んでいることの内容までは、源助は分からなかった。

——やっぱ、聖護院、ストーカーやと思われとるんかな……。

謎の大根の贈り主に悩んでいるような彼女を見て、たまに見る朝のワイドショーの事件報道を思い出しながら、分かんなくてもないと源助は頷く。

なんで人間は大根みたいに真っ直ぐで真っ白やないんやろーなー、などと考えていたが、やがて初夏は立ち上がると台所へとやってきた。

そして、手際よく一人分の夕食を作り始めた。いい匂いが源助の鼻をくすぐる。どうやら料理は得意らしい。もしかして二人分作ったりはしないか、と源助は少々ドキドキしたのであるが、それはないようで今日は仕事も休みだからか、六時過ぎには早めの夕食をひとりで摂っていた。

さてその頃。

「おっかえりなさい」

隣の家では青一郎の作る夕食の匂いがする中、波限が仕事から帰宅した。

「おー」

しかし出迎えたのは青一郎だけで、いつもの鬱陶しい大根が居ない。

「あれはどーした」

鬱陶しい奴ではあるが、波限の態度が冷たい所為で家出でもされたら流石に目覚めが悪い。波限の早速の質問に、青一郎は内心ぎくしゃくとなりながら笑って答えた。

「け、結婚式に呼ばれたんですって」

「はあ？」

——あの大根王国、婚姻制度まであるのかよ……。

源助に言われたままの苦しい言い訳をした青一郎であったが、最早この大根については突っ込むのも馬鹿馬鹿しいと思っている波限は、却ってそれ以上何も言わずにあっさり「あっそ」と引き下がった。

誰よりも信頼しているこの青年を騙していることにはどうしても気が引けたが、とりあえず青一郎は安堵していた。

……でもあのトラブルメーカーの源さんが、何もなく終わるとは思えないんだけど……。

青一郎は台所で、こっそりと不安げなため息をついたのだった。

壁（４）

夕食も済ませ、入浴も済ませた波限の家の隣の佳人、初夏。

Ｔシャツにジャージのようなパンツ。その格好からも、これから外出するとは思いがたい。男が訪ねてくるにしてもリラックスしすぎている。

——今日は、たまたまそういう日じゃあらへんだけかもしれんけど……。

源助は細かく初夏の様子をチェックしていた。たまにその不穏な視線に気付くのか、彼女は台所を振り向くが、ぱたりと倒れて普通の大根のふりをした。

——ふー、危ない危ない。

テレビを見たり、ノートパソコンを広げたり、雑誌を読んだり……まったりとくつろぐ女性。途中、携帯電話を取り出したので源助はどきつとしたのだが、メールを少しの間して、終わったようだった。

——まあ彼氏とメールしとるかもしれんし、毎日電話するとも限らんしな……。

青一郎がつまらないと言ったとおり、本当にまっとうに夜の時間を過ごす彼女。もしかしてこう見せかけてあばずれ（死語？）なのかもしれないし、ネット上で副業してがっばり稼いでいるかもしれないし……女は本当に分からない。これは何日か此処に住み込まねばならないか？ と密かに源助は思っていた。

しかしただひとつ、初夏の中で不思議な行動があった。

薄い壁一枚だ。耳を済ませば隣の源助が住んでいる部屋の音は、波限と青一郎が二人で過ごしているからか、よく聞こえてくる。三人で話している時は、初夏の部屋の音は殆ど聞こえないのだが、こちらは女性の一人暮らしであるため静かだからより聞こえるのである。

ろう。

波限たちも夕食が終わったのか、内容は聞こえないが若干の男性同士の話し声と物音が聞こえた。初夏はその音に反応したように、隣へと繋がる壁を見た。

彼女はそちらをじーっと見て何事か考えていた後、台所に置いておいた大根——源助を見て、彼女自身のの格好を上から下まで見て、そしてまた壁を見て、最後にため息をついた。

——なんや？

バカだバカだと言われているが、時々妙に鋭い大根。そこに「何か」を感じたが、何かまでは分からなかった。

何かひらめきそうなのに、出てこない——。

源助がうーんと悩んでいると、そこでまたインターホンが鳴った。

「よくお客さんが来る日だなあ……」

初夏はひとりで呟くと夜にも関わらず、とことことドアの方へ近づいていった。この時、彼女は先程の謎の贈り物——大根の贈り主のことで頭がいっぱいであった。その贈り主がもしかしてさっきは……と再び訪ねて来てくれたのではないかと言う浅はかな期待を抱き、覗き窓を覗いても相手の姿がよく見えなかったこともあり、チーンをつけてではあるが思わず扉を開けてしまったのであった。「掃除機の訪問販売やってます、ホニャラクリーンという者ですが……」

「はあ……」

——しまった……。

それは運の悪いことに、ただの訪問販売であった……。

……

初夏は自分の思うことがはっきりと言えない。子供の頃はそうではなかったが、思春期を境にそれが怖くなった。なのでこういう強

引な手合いが一番苦手なのである。

しかも訪問販売員も生活が掛かっているらしく、妻や子供を養わねばならない話を涙ながらにしながら、延々とスタンド式とかぞうさん型とか空を飛ぶタイプとか様々な掃除機の話をやどみなくする上に、今ならなん洗剤とティッシュがついてくるとかなんとか……。そんなのいらない……と初夏は思うが、迫りくる相手もプロだ、彼女に口を挟む隙を与えない。

一人暮らしをしたいと実家を飛び出すように出てきたのはいいのだが、やはりこういう時は女一人だと困るし怖いものだ。それこそ家に頼れる彼氏でもいいが、今この家には一人きり。隣に頼る――？　といっても、まずこのドアを開けてこの訪問販売員を押しつけてはならないし、そんな義理は隣の人々にはない。

ご家族のことはかわいそうだけど、早く諦めて帰ってくれないかなあと、買う気もない初夏は生返事を続けながら困り果てて立ち竦んでいた。

——おいおい。こないなモンがつんと一言言って断りやええやろ！。

その様子は台所に居た源助に丸見えであった。

——よお言われへんってタイプか。まあまだ若いし、これからふてぶてしくなっていくやろーか。ケツコンしたり母親になれば、ちつたあ強くなるかな、がんばれよ聖護院……。などとそれを聞きながら勝手に考えていた源助であったが、終わらない押し問答を延々と三分も聞いているうちに、短気な彼はすぐに腹が立ってきた。

——つつつか、何やっとなるんや聖護院、千載一遇のチャンスやないか、助けに来たれよ！　と歯がゆくなるものの、玄関が通れない状態になっているので源助も彼を呼びにいくことも出来ない。ベランダも大根の足では飛び移れない。

といったのらりくらりと交わしてはいるが、初夏嬢が困っているのは見ていても哀れだし、人が嫌がっているのに押し売りを強要し

ているのにも聞いていて腹が立つ彼。

そこで源助は眼（などないけれど）を座らせると、初夏の後ろをこつそりと通り台所から六畳間へと移動した。そして彼は仕切り戸の影に隠れ、もう我慢ならないと言わんばかりに大きく息を吐いた後、すつ、と息を吸い込み——、彼の中で最も低いと思われる声を、少しドスを利かせようと大きめに出したのであった。

「おい、ハツカ、いつまで待たせるんじゃ、ワレエ！」

その柄の悪い、チンピラのような方言交じりの声に、初夏も訪問販売員もぎよつと驚いた。

「あんま人のコト待たせんや、いてまうぞ、コラ！ まさか昔の男やないさかいな。もしほんなんやったら、ソイツの顎の骨ガツタガタ言わし——」

「かかか彼氏さん見えてたんですねー、それは失礼しましたー！！」
四十代位の痩せた訪問販売員は、こんな清純そうな顔してチンピラの女だなんて世の中信じらんない、訪ねた家がまずかつた〜と、そのガラが悪い男の声に恐れをなして、一瞬のうちに退散していった。

—— いいいい今は！？

驚いたのは初夏の方である。いつの間に家に自分の名前を知っているチンピラが上がりこんでいたのか！？ とそちらの方が余程怖かった。

だが何処かで聞いたことのある声と、変な方言——そう、それは隣の部屋から、そして下の畑から、ちょうど今年の春頃からたまに聞こえてくる、よく通る独特の声と同じものだったような気がした。それでも別人かもしれない。それに隣の青年にも高校生にも会ったことはあるが、その変な言葉遣いの男にだけはまだ会ったことがなく、隣に住んでいるとは限らないのだ。

それでもタイミング的に、自分を助けてくれたように思えた。もしそうならば実はいい人なのかもしれない、と安堵もするが、どう考えてもその人物がいつの間に家の中に入ってきたか、初夏には分からなかった。

緊張しながら、特に人影も見えない六畳の方へとドキドキしながら初夏は歩いていく。

「だ、だれがいるんですか……？」

そして恐る恐る部屋を覗くと――、其処には、台所に置いておいた筈の今日玄関の前にあった大根が、リボンを巻かれたまま横たわっていた。

「え……??」

何が起こったのかわからず、初夏はぺたりとその場に腰を落とした。

なんとタイミング悪く、訪問販売員が来た時は夕食の片づけをされていて聞こえなかったせに、源助の大きな声がした時は夕食の片づけが終わり、そろそろ風呂でも入れるかと二人でお茶を飲んで静かにまったりとしていた時間に差し掛かっていたため、隣の部屋の波限たちには源助の声は丸聞こえとなっていた。

「――!？」

しかも元々よく通る彼の声は、意図的に大きく出したのもあって、見事に波限の部屋まで薄い壁を通って聞こえてきたのであった。

「おい、今の――」

嫌でも毎日毎日聞かされてきた声だ。分からないわけがない。波限は新聞からはっと顔を上げて、風呂を入れようと立っていた青一郎を見上げた。

その眼鏡の眼と青一郎のくりくりとした眼が合った。

「え……っと……」

青一郎は嘘が得意だ。母親が死んでからは、特にそうだった。だ

けどこの青年にだけは嘘がつけなかった。ついたとしてもすぐに、知られてしまう。そんな気がしているから尚更ついても意味がない。確かに生まれた時から一緒に居るのだし、青一郎の小さな変化を見逃すような人間ならば、ここまで彼も信頼しないだろう。

そして波限もそこまで愚鈍ではない。青一郎の様子から全てを察したようだった。

「てめえら……」

彼はまるで地獄から這い上がって来るかのように低く、呟いた。

——うっわー、きたよきたよきたよ！ 源さんのばかり！！
青一郎は心の中で涙したが、彼を騙したのは自分たちの方だ、今更後悔してももう遅い。

波限は、だんっ！ とちゃぶ台に一発拳を入れると立ち上がった。その肩が怒りに震えている。

「向こうに、あのバカが居るんだな……？」

ゆらりと自分に近づく青年に、青一郎はこくんと頷くと、ごめんなさいと完全に白旗を揚げて全てを認めることとした。

「すみませんすみませんすみません」

「一応、聞くんが前からあいつと彼女が知り合いだったという言うオチか……？」

「そ、それは、わかりません……」

いっそそという事にしておけばよかったと青一郎は思ったが、今更嘘はつけない。

「だとすればまだいいが、覗きみてーにコソコソ忍び込んだんじゃねえだろーな……。人のプライバシー覗かれて、気分いいヤツがいると思うか！？」

青一郎が幼い頃から、叱る時に胸倉を掴んだり暴力を振るったりすることは絶対にしない波限だが、完全にキレた状態だ。悪さをし、て仕事で居なかった母の代わりに、彼に力ミナリを食らった小さな頃の思い出す。

確かに源助と初夏が仲良くなるという手は、寧ろ本当に波限と初

夏が上手く行った時のことを考えれば中々良い手でもあったのだが、源助が大根である以上リスクが高くそんな方法は考えもしなかった。波限もまた、喋る大根など騒ぎになるのが嫌で周囲に内緒にしていたので、その可能性は薄いと考えていた。

——とすれば考えられる状況としては、俺の為などとほざいて彼女の家に忍び込んだのか…？

イタズラがバレた子供のように、青一郎は首を竦めていた。

確かに相手が覗きを喜ぶ変態でない限り、波限のいうことは正しいからだ。たとえ波限が彼女の私生活とかお風呂とか本当は覗いてみたいと言う欲望をフツーに持っていたとしても、彼自身はそれが犯罪となることであれば絶対にそれには手を出さない性質であるので、この場合、保護責任がある少年を叱る方に理性がシフトされているのだろう。

それが分かっているだけに、「とにかくごめんなさいー」と青一郎はひたすら謝ることに徹する。

青一郎の様子や彼の年齢からしても、これだけ言えば反省するだろうことは波限にも分かった。なので彼はそれ以上何も言わずに、今度は玄関へと向かった。

「なぎささん、どこへ!？」

「連れ戻しに行く」

ちらりと置時計を見れば午後八時半。——まだ失礼な時間ではない。

キレた波限にとって、今は彼女と話すことが照れ臭いとかそんな事は関係ない。

他人のプライバシーに土足で上がりこんだあのバカ大根をさつさと連れ戻して一発怒鳴らないと気が済まないのだ。

源助が声を出したことからしても、彼女はもう喋る大根の存在に気付いているだろう、と彼は察した。それが己の差し金だと思い、自分を軽蔑しているかもしれないが、今はそんなことよりも彼女――

——しかも惚れている女——に迷惑を掛けているこの状況の方が、波限には腹立たしかったのだ。

波限のこういう部分は青一郎もよく知っていたが、本当に許せないと彼が怒りを感じた上での行動であるので、誰にも止めることなど出来ない。だがそこではつと「あること」に気付いた青一郎は、これだけは言わねばと、波限の前に立ちふさがった。

「ちちちちちよつと待ってください！」

「何だよ！？」

「なぎささんほどの方が気付かないんですか！？　今、源助さんの声が聞こえたでしょう？」

波限は「ああ？」と眉を寄せて、必死で自分に訴えかける背の低い青一郎を見下ろした。

「おれたちいつも三人でうるさくしてたし、お隣はいつも一人で静かだったから気付かなかったけれど、——そういうことなんですよ！　源さんの声って特によく通るんですよ！　てことは、」

隣に住むのは静かに日々を過ごす女性が一人——。

「こんなボロアパートの薄い壁、既に、おれたちの会話なんて……その、なぎささんがはつかさんのこと好きだとか……今更ですが、お隣まで筒抜けだったんじゃないですか……？」

恐る恐る自分を見上げて言う青一郎の仮定に今頃気付いた間抜けな青年は、ガラガラと足元が崩れ落ちていくような感覚に目眩を覚えていた……。

恋をしています（１）

源助はこの期に及んで、初夏の前で普通の大根のふりをしようと粘った。内心ではドキドキしながら沈黙して横たわっていた源助であつたが、初夏はその大根を抱き上げて、

「あのー、もしもし」

などと身体を撫でて話しかけてくる。さすがにこれには源助もくすぐったさに耐え切れず、

「わはは、おい、やめろや、堪忍して」

と突然笑い出し、驚く初夏の手からすべり降りた。

……だ、大根が、喋ってる……！

普通なら不気味がったり叫びだしたり、卒倒しかねないような光景だ。現に波限に拾われるまでも、源助は何度か化け物扱いされてきた。

しかし実は初夏には、絵本が好きだとか可愛いものが好きだとか、少々夢見がちなどころがある二十代だったのだ。

「すつごーい……」

彼女は感嘆の声を漏らすと、もつとよくそれを見ようと、床に二本足？で立つ大根の方に興味津々で顔を寄せた。

——なんや、このねーちゃんも聖護院と同じタイプの人間やなー。それは直感であつたが、源助は冷静にそう思ったが、

「どうして喋れるの？　っていうかどうして私の家の前にいたの？」

初夏の矢継ぎ早な質問に、この状況を自覚してぎくつとさせられる。「え、えーっとな、ワシが喋れるんは大根の神の美しき清白様が、ワシに命を吹き込んでくれたからでな、そんで……」

とりあえず答えやすいところから答え始めたが、結局此处に至る理由は、聖護院に恩返しをする為であり、その為に彼が惚れた初夏の家に忍び込んで、彼氏がいるかとかスリーサイズとかリサーチに

来ました、などといくらとぼけた大根の彼でも言えるワケがなかった。

「そ、そんで……」

「いつもは、お隣に住んでるんだよねえ」

年齢は不詳だが、形状が可愛らしい（と初夏には見える）ので思わず子供に話しかけるような口調で、初夏は言った。

「へ？　なんで知つとるんや？」

流石に源助も驚いた。

「だって声たまに聞こえてくるから……。それが大根だったとは思わなかったけれど……」

「マジで！？？」

確かに先程、波限たちの声はぼそぼそとは聞こえてきた。それに波限と話していると、互いにヒートアップして、よく声が大きくなってくる。

……あれ……？　つつと、もしかして……。

波限よりも察しよく、源助は「その事実」に気付いた。

——この子、……既に「あのこと」、聞こえとつたんやないか……？

源助はドキドキしてきた。性分としてもういつそストレートに聞いてしまいたかったが、それで波限が軽蔑されたり嫌われてしまっではいけない。源助は色々な意味で苦悩し始めた。

だが、すぐにその必要はなくなった。

ピンポンと、また初夏の家のインターホンが鳴った。

「ほんと、よくお客さんがくる夜だね……」ってさっきの訪問販売の人じゃないよね……」

たとえ大根でも誰か話せる人が家に居てくれるのは嬉しい。初夏は思わず源助に問い掛けた。

「そんなときやまたワシが一発言うたるし、ダメやったら最悪、聖護

院……あ、隣のにーちゃんな。呼んだるで！」

初夏はその言葉に笑って頷くと、もう一度インターホンが鳴ったので玄関へと向かった。そして覗き窓を覗くと予想していない人物の来訪に——だが、この大根が此処に居ることを思えば、思い切り納得できる相手でもあり、初夏は息を飲んで、ドキドキしながら源助を振り向くと言った。

「おとなりの……おにーさん、だった……」

……

本当は色々な意味で緊張している波限だが、とにかく今はあの大根への怒りが一番だった。なので最終的には「怒った」表情となり、彼はでん、と初夏の家の前に立っていた。

その隣では青一郎が、「なぎささん、ここはひとつ穩便に」

と取り成すような微妙な笑顔を浮かべて立っていた。

そして——、ドアは開かれた。

隣の青年の用件に想像がついたので、初夏はチェーンを外してドアを開けた。初夏にとって風呂上りのＴシャツにジャージという格好は少し恥ずかしかったが、着替えている暇などもないし、待たせるわけにもいかない。当たり前だが着飾るのもおかしい。

そして彼女はこの距離で話をするのは初めての、背の高い眼鏡の男を見上げた。

「くんばんは……」

とりあえず、挨拶をする。

「夜分遅くにすみません」と無愛想な声での前置きの後、

「ウチのバカ……大根が、世話になっっているようですが」

緊張やら怒りからでなった低い声が、波限の口から発せられた。別に初夏のことを怒っている訳ではもちろんなく、寧ろ申し訳ない気持ちで一杯なのだが、

「なぎささん、そんな恐い顔しなくてもー。おねーさん、恐がってますよー」

反対に一緒に連れてきたのは正解だったのか、青一郎が愛想よく笑ってフォローしてくれた。

「えっと……」

——よく分からないけれど、お隣のおにーさんは怒っている。大根さんと、喧嘩でもしたのかな？

初夏は大根がこの恐ろしい様子の青年に怒られるのではないかと心配になってしまい、正直に彼の所在を言っでよいのか分からなくなる——が、しょんぼりとうな垂れ、干し大根となりつつある源助が自ら、とぼとぼと初夏の家の中から現れた。

「ねーちゃん、聖護院……堪忍なー！」

波限の怒りの理由は分かっている源助は、がばつと勢いよく頭を下げて謝り始めた。

「とりあえず、帰るぞ」

波限は表情を少しも変えないまま、源助を担ぎ上げた。

——これ以上、初夏に迷惑は掛けたくない。さぞかし不気味な思いをしただろう。

そして彼は初夏に向かって深く頭を下げた。

「ご迷惑掛けて、すみませんでした」

もうこれで、「不気味な大根を操り、覗き行為をする気味の悪い隣人」という悪印象は決定である。波限は最早初夏の顔も見られず、引越し先はどうしようかとか、警察沙汰になったら職失うかな、そうしたら青一郎は……云々と胸中で心配しつつ、退散しようとした。すると——、

「あ、あの一、」

初夏に呼び止められ、思わず三人は驚いて振り返った。波限もまじまじと、やっぱり可愛いなあと思うその黒目がちの眼の顔を見下ろした。

「……別に、迷惑じゃなかったです。大根さん、私のこと助けてくれたんです。訪問販売の人、追い払うために大きい声出してくれて……だから、」

家を荒らされたわけでもなく、何も迷惑には思っていない。寧ろこの大根の妖精（？）と、初夏はもつと話をしたいほどだった。

事情も分からないのにお節介を焼くのはよくないことだと分かっているが、流石に助けてくれた相手を自分に迷惑を掛けたと誤解され怒られるのは、この大根が可哀想に思えたのだ。だから殆ど話したことの無い男性であつたが、彼女は勇気を出して声を掛けたのであつた。

この無愛想な青年が自分を心配してくれ怒ってくれたのは初夏も内心は嬉しかったし、しゃしゃり出てくる女だと嫌われてしまうかもしれないが——それでも助けてくれたことへの御礼として事実を伝えたかつた。

「よく分からないのにこんなこと言っちゃいけないけど……、迷惑してないから、怒らないであげてください……」

——どうして大根が自分の家の前にいたのか、未だによく分からない。

家出だつたのだろうか？ でもこのお兄さんは恐そうな顔をしているけれど、優しくて実直ですごくいい人なんだと高校生君は言っていた。だからこそ私もこんな風に言えたんだし、大根さんとのことも何か事情はあると思うんだけど……。

しかし初夏はこれ以上どう言つたらよいのか分からなくなり、困つたように波限をじいーっと見つめて言葉の代わりに訴えかけた。

突然の展開に、波限も驚いて言葉に詰まる。

——なんと意外にも、初夏はどうやら大根が気に入つたらしいのだ！

それに自分がこの大根を虐待していると誤解されても困るし、彼女が迷惑していないのなら、確かに怒る理由もない……何より、こ

れだけ見つめられてそれでも怒れるはずがなかった。

「大丈夫、ですよ……。別に怒りはしませんから」

波限はどきまぎしながらも、なんとか声を絞り出し——だから低く恐いものになるのだが、今度こそ「おやすみなさい」と三人はそれぞれ初夏に言って、また台風のように騒がしく隣人の女の前から去っていった……。

彼らの家のドアが閉まるのと同時に、初夏も家のドアを閉めの中へと入った。

からつぽの部屋がとても静かに感じた。

「……楽しそうだなあ」

——あの三人（二人＋一本？）は本当に仲がいいなあ……。

初夏はそう思うとひとり寂しく、部屋の真ん中にぺたんと座った。そして今しがたの会話を思い出す。そして小さくひとりごとを呟いた。

「嫌われてないといいけどなあ……」

変に好意をもたれているかもしれないと思うと、それが確かなことでない分、余計に嫌われないか恐くなるものなのだ。

——別に、ちゃんとあの人、本人に「言われた」わけでもないんだけど……。

恋をしています（２）

「『』というわけで、すみませんでした！」「」

あれから五分後。波限に向かって青一郎と源助が床に穴が開きそうなほど、額を擦り付けて土下座していた。

「別に……。もういい」

からやめろ、とそこまでする二人に対し、背中を向けて新聞を広げながら波限は呟いた。

……お、怒られないのかな……？

生きながら地獄を見られる経験が出来るんじゃないだろうか、とんでもない雷を予想していた二人はその言葉に驚いて思わず波限を見上げる。まだ怒りのオーラは感じられたが、彼は一度そう言ったらそうする男であるから、本当にもう怒らないのだろう。

青一郎と源助は波限のいるちやぶ台へとにじり寄っていった。

——まず、そもそもこの二人にまったく悪気がなく、自分がいろいろと心配かけるような態度をとっていたのが全ての原因だったのかと思うと、波限も確かに怒れなくなってくる。

違法なことをしている部分については叱ろうと思ったし、ましてや初夏の心を傷つけるようなことがあれば、それは許せないと思っていた。しかし初夏の言葉や様子からして、このアホ大根が迷惑ではなかったというのだ。

だったら不問にするしかないではないか。……それに初夏にも約束してしまったため、彼も嘘はつきたくなかった。

やっていることは覗きと変わらない筈なのだが、どうやら本当に源助の言うとおり大根というフォルムが隣の少しばかりぼうつとしていた女性に気に入られ、その犯罪を完璧にしたんだな、と波限は妙に納得させられてしまっていた。

「で、でもよかったじゃないですか、なぎささん。はつかさんとお話できたし、なんか源さんの秘密も共有できちゃったし、これをき

っ かけに仲良くできるんじゃないですかー？」

「……」

波限は無言だったが、源助は、「え？　もしかしてワシ愛のキューピッド??」と呑気に喜んでいる。

「お風呂上りも、なんか私生活って感じでジャージはジャージでかわいかったし、しかも、のーぶらでらつきーでしたねー」

にこにこ天使のように笑って言う男子高校生の頭は、当たり前であるが青年により、げいんと思いい切り拳で殴られた。

……すみません、調子こきました、と青一郎は痛む頭を押さえてちやぶ台に突つ伏した。これだけ処世術を心得た少年であるのに、波限の前だけでは一言多いのが不思議である。

波限は殴った拳を未だ震わしたまま、片手では新聞を開き視線はそこに注がれていたが、青一郎にも気付かれたってことは、さっきの訪問販売員だとかにも気付かれたんじゃないかと、そんな無防備で一人暮らしをさせていて大丈夫なのかとか密かに心の内で心配になっていた……というか彼もまた、それに気付いていたというところか。

それはさておき、と青一郎は話題を変える。

「それで、源さんは何か分かったんですか？」

よくないことにしろ、折角忍び込んだのだ。もし何か分かれればそれはそれでいいじゃないか、と青一郎はこの期に及んで盗人猛々しく考えていた。しかし源助は肩を竦めると、ふるふると首を振る。

「ダメや。ほんとーに、あのねーちゃん健全そのものやったー。あれだけの時間じゃ何もシッポ出せへんかったわ。まー、彼氏みたいのと電話したりはせえへんかったけど……今夜たまたませんかっただけかもしれへんし、もしかしたら本当におらんのかもしれへんし」

そっかー、と残念そうに言う青一郎と、それこそ知りたくないわけじゃないけれど、変な……この場合、彼女が傷つくような情報を手に入れられてきても困る波限は、どことなく安堵していた。

「つつつか、」

しかしそこで源助は今更気付いたように手を打った。

「ワシらの声って隣に筒抜けやったんやな！」

そこで怒りにかまけて忘れていた恥ずかしい事実を思い出し、今度は波限がちゃぶ台に頭をぶつけ、「そうなんですよ！」と青一郎は身を乗り出してくる。

そもそもお前らが冷やかすからだろうが……と波限は思ったが、それも元々素直に認めなかった自分が悪いのか……？とやはり結局素直でなく一步を踏み出せない彼自身に戻ってくる問題なので、怒りと羞恥を堪えて押し黙った。

「でもはつかさん、ふつうにお話してくれましたねー。やっぱりすごいひとなんでしょーか。それとも……？」

青一郎が言い掛けた時、「あー！」と源助が叫んだ。

「どーしたんですか？」

「あまりデカい声出すな！ 聞こえるー！」とひやひやしている波限はいつ注意しようかと思いつつも、やっぱり源助からの情報が気になったので黙っていた。

流石にまずいと思ったのか、源助の声がワントーン低くなった。

「あーそれでかー」

ひとりで納得したような様子に、青一郎が「なにになに？」と顔を近づける。源助は小声で言った。

「あんな、こっちの部屋からの声が聞こえてきた時な、はつか嬢、妙に反応しとったんや……」

一点だけ不可解だった、彼女の行動。

「言われて見れば、ワシのことも聖護院からのダイコンのプレゼントやないかと思っとなみたまいやし……。なあ、まさか、聖護院が自分のこと好きやって知つとるもんで、意識しとるんやないか、ねーちゃんは」

「「……………」」

——まさか、ねえ……。

その突然の大逆転に、青一郎と源助はちろりーんと青年の方を見ようとした――が、その瞬間、だん！とそれこそ隣まで聞こえるんじゃないかと思うほど強くちゃぶ台に手を置き勢いよく立ち上がる

と、
「風呂入って、寝る」

と青年は突如として動き出した。

青一郎と源助が呆氣にとられているうちにも、波限はさっさと浴室に行ってしまった。その表情は、見えないまま――。

「なぎささーん、これからのこと、話し合いましょうよ」

「そーやでー！ こっからおもろくなりそーなのに！！」

と外野は勝手に盛り上がり始めるが、波限は脱衣所で眼鏡を外すと頬を一発片手ではちんと叩いた。

――今夜一晩で、色んな事がありすぎた……とりあえず、この家を出て行かなくてはいいけなかったり、警察を呼ばれるほど気味悪がられたり軽蔑されているわけではないこと、話が出来たことだけで……よしとしておこう。

今はもう考えるのをやめよう。そうでないと、あまりのことに恥ずかしくて、気が狂ってしまいそうだった。果たして自分はこんなに純情な人間だっただろうか……。

何処かで犬の遠吠えが聞こえてくる。

何かが大きく動いた夜が、更けていく――。

恋をしています（3）

隣の家では暗い部屋の中、布団の中で一人の若い女性が眠れなさそうに寝返りを打っていた。

初夏もまた、このアパートに引っ越してきてから、そして隣人を意識し始めてから、今日までのことを思い返していた。

・・・・・・・・・・

ここ数年会話をしなくなった歳の離れた兄が出来ちゃった……ないし、おめでた婚で結婚して、兄一家は初夏の家で暮らし始めたため、彼女は自分の居場所が無くなったように感じた。

もう子供じゃないんだし、とそういった事情で初夏は家を出て一人暮らしをすることにしたのであった。

職場に近くて安いアパートを探す。少々古かったものの安い割にリフォームもされており、昔ながらの大家のおじいさんが居て、とても親切そうだったのでこのアパートを選んだ。

大家の老人は言った。お隣は公務員の好青年と近くの進学校の高校生の家族だと。そういった肩書きがあっても犯罪をする人間はいる、と初夏は当てにはしていなかったものの、確かに暴力団の一味などと言われるよりは安心出来た。

引っ越してしばらくして、隣の青年に会った。とりあえず挨拶は大事だからとしてみたものの、彼はにこりともしない。第一印象は少し恐かったものの、会釈は返してくれた。その後、高校生の少年にも会った。逆に彼は不気味なくらいににこにこしていた。

……正反対の兄弟だなあと彼女は思った。——この時は、二人の血が繋がっていると思っていた初夏であった。

しかし隣の二人は夜中まで騒ぐこともなければ変な行動も見られ

ず、いつも同じ時間に美味しそうな食事の匂いがし、毎日同じ時間に仕事にも行っているようであるし、時々楽しそうな声も聞こえてくるし、見た目は健全な生活を送っているように見えた。そのことには少しほっした。

やはり昨今の世の中、ニュースを見ていたら恐いことばかりだらだ。歳が離れているが、互いを思いやる仲の良い兄弟なんだろうな、というイメージが初夏の中に植えつけられた。

そんな中、隣の青年が間違って届いた荷物を届けてくれた。最初は驚き、やはり警戒もしてしまったが、荷物だけ置いて彼はあっさりと帰っていった。律儀な人かもしれないと思った。

背も高いし、ちよつとかっこいいかもしれない……とこの時彼女は、年上の青年に対して少しばかり思ったのだった。

そして何ヶ月も過ぎるうちに——今年の春頃か、いつの間にか、隣から聞こえてくるにぎやかな声が増えていた。

まさかその声の主が大根だとは、よもや思わなかった初夏。ただ単に、変な方言の人だなあとその時は思っていた。よく来る友人なのだろうか、とも思っていた。

走り回り物が飛ぶ賑やかな音がすることが増えたが、就寝できないほどうるさいわけでもなかったため、たまに聞こえてくると楽しそうでうらやましいと思うほどであった。もちろん初夏にも友人はいるが、あそこまで思い切りじゃれあたりしない。

丁度その頃だ。隣の青年と高校生はアパートの前でなんと、開墾までして畑仕事を始めたようだった。本当に健全な人たちだなあ……今時、こんな若者がいるんだなあ、と彼女は自分も若者のくせにこっそりと感心していたものだった。

——そして更にその頃だった。隣から、聞こえてくる会話の中に、『はつか』

と自分の名前が混じっていたのは。

彼女は驚いた。

理由が分らず恐怖も覚えたが、だからと言って何かをされることもなかったため、不思議に思いながら自分の名前が出てくる会話をよくよく聞いてみると――、

——はい！？……まさか、ねえ……。

目を見開いて、胸をどきりと高鳴らせる。壁に耳をつけて聴いたわけでもないから確かではないが、窓が開いている日に隣の部屋から、そして畑の方からなんとなく聞こえてくる話からして、

——あのおにーさんが、わ、私を……？？

……らしいのだ。

彼女は驚いた。しかしやけにドキドキとしてきた。決して嫌いなタイプではなかった。むしろ――。

何よりも、彼女は男性と付き合ったことが一度もなかったのだった。地味で大人しいからか、学生時代に告白をされたこともない。だから余計に驚き、そして……彼のことが、とても気になってしまったのであった。

しかしアパートは生活空間であるからして、ジャージでうろろしないものの、化粧もせずに出歩くことはよくしており、隣には風呂やトイレなどの生活音も聞こえているだろう。布団を干したり、洗濯物を干したりと恥ずかしい姿をたくさん見せてきた気がするが、そのあたりは大丈夫なのだろうか……。

だが本人に言われたわけでもないのに、自意識過剰なだけかもしれない、と彼女は自分を叱咤する。

高校生の方とはまだ言葉を交わしているが、青年とは話が出る仲でもない。だから何も聞けなかった。

——困惑と胸の高鳴りだけが日ごと募っていく。

二人の歳が離れた兄弟の仲がよさそうな畑での姿を時折見下ろしては、不思議な気持ちにさせられていた。

そんなある日、アルバイト帰りらしい高校生の方が話しかけてくれたのだった。青年の情報を何故かたくさん教えてくれたものの、二人が本当の兄弟じゃないと聞いて初夏はどきりとした。

本当の兄妹でも分かり合えないでいるのに、他人同士でもこうしてここまで信頼し合えることが、これまで以上にうらやましくなった。きっと二人とも、心が優しいからだろう。

そこで青年には、今、彼女がいないということも教えられた。……でも昔はいたらしい。確かに初夏よりも五つほど年上であるようだし、かつこいいからモテそうだよなあ、と彼女は何故かシヨックを受けてしまった。

そして次の日、畑仕事の帰りの青年に偶然会った。真偽は分からないものの、犯罪などを企んでいない限り自分のことをいい風に思ってくれるのは、純粹に嬉しいものだ。だからいい印象の自分で居たい、そう思っただけで彼女はいつもどおり自分から挨拶をした。

すると、たった今、間引きしたとかいう大根菜をもらってしまったのだった。

——初めて、男の人からプレゼントをもらってしまった……。

実は情けないくらい男慣れしていない彼女は、それくらいで意識してしまっただけであつた。そんな小さな出来事が嬉しかった。栄養豊富そうなものを善意でくれたことが。

それくらいで、自分に自信はないものの思い上がりそうになっってしまった。

誰かに何かをしてもらえることはこんなに嬉しいんだな、そして嬉しいと思えるということは、その人に対して自分は嫌悪感とは逆の感情を持っているのかもしれない——。そんな風に考えると、妙に笑みがこみ上げてくる。

その晩、大根菜は味噌汁に入れた。少し苦かったが、とても美味しかった。

しかしそんな風に浮かれていたある日曜日の朝、青年の部屋から

まるでモデルのような美女が彼と一緒に出てきたのであった。しかも二人とも背が高いから、とてもお似合いに見えた。

やはり男性経験の無い自分とは違うのか。背も高くないし胸もないし、ぱつとしない自分を、初夏はとても惨めに感じた。——彼女は、前の晩に泊まっていたのだろうか。

高校生は今、彼に彼女は居ないと言ってたが、どういう関係なんだろう。

ゆづべは二人で何をして過ごしていたんだろうか——。音は聞こえなかったけれど……大人だし……。

初夏はそんなことを一瞬のうちに考え、一人で盛り上がっていたことが、ばかみたいに感じた。

そして彼女自身もよく分からないがこれまで以上にショックを受け、これから出かけるらしい二人の顔も見ずに急いで家に入った。

——複雑な気持ちだった。話したこともないのに、何故こんな気持ちになるのか。

自分の持つている気持ちがなんなのか、彼女はよく分からなかった。

まだ彼と何を話したわけでもない。こんな幻想のような、何の事実もないことに。そんなものに心を任せてしまつてよいのだろうか。そんな風に悩み始めた。

恋をしています（４）

それから少ししてから夜遅い時間に、隣の窓が開く音が聞こえた。初夏が少しドキドキして、期待しながら自窓を開けたところ、青年がベランダに出て月を眺めている姿が見えた。

——何を、考えているんだろう。

その横顔が、すごく遠く感じた。——彼女には届かないような、深い、何かを。

初夏はそれを知りたくて、こんな離れたベランダからでは何も聞けないが、それでも一瞬でも顔をこっちに向けてほしいと思い、視線を送り続けていたが——彼はそれに気付かなかったのか、あっさりと家の中に入ってしまった。

……残念だ、と彼女は思った。

壁一枚の距離なのに、とても遠い。彼のことを、何も知らない。何も聞けない。

それをとってももどかしく、切なく感じた。

——もっと、彼のことが分かればいいのにな。

自分なんかを本当によく思ってくれてるのかな。

それが本当ならば、こんな自分のどこをそういう風にいいと感じてくれたのか、とても気になる。

いよいよまるで恋をしているようにそんな風に思い始めてしまっている……今日の夕方、初夏の元に突然一本の大根が届いたのであった。

——おにーさんからかな？、と彼女は期待してしまった。しかしよく物を与える大家の老人からかもしれない、と期待しないでおこうとも思った。「私にくれたんですか？」などと、図々しいことは隣に聞けない。

そうしているうちに夜になり、訪問販売がやって来て、困っているとその大根が喋り出し、親切にも助けてくれ、しかもそれは春頃から聞こえてきたあの変な方言の主の声と同じであったのだ。

喋る大根がいることに初夏が驚いて感動しているうちに、青年が血相変えてやってきた。

その迫力に少々怯えそうになったものの、最後は初夏の話に耳を傾けてくれ、信じてくれた。やっぱり優しい人なんだろう、と彼女は安堵した。そして、あれだけ高校生君にも大根さんにも慕われているんだもん、男に慕われる男はきつといい男だよ——と今夜のことで確信も強まった。

何よりもようやく話が出来たことが、今日の一番の収穫で、初夏はそれがとても嬉しかったのであった。

——また、お話、できるかな……。

隣の女性は隣の女性で、今までのことを思い返しては、そんな風に期待し始めていた。夏の夜。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「旧暦の十月十日はな、田んぼの神さんが帰る十日夜とおかやなんやけど、『大根の年取り』ともゆうてな、この日には大根畑に入ってはいかんのやぞ。うっかり、ダイコンのはぜる音なんか聞ーたあかつきには……死んでまうって言い伝えがあるんやでー!!」

「こわいですー!!」

あれから時は少し流れて夏休み真っ盛り。まるで小学生の授業のように、源助による秋播き大根についての学習会が行われている。

波限は聞きたくもないものの、ちゃぶ台の上でハチマキをして講義をする大根の話を、熱心に聞き入る青一郎の隣で無理矢理聞かされている。

「今の暦でいえば、十一月の上旬やな。その頃に、秋撒きダイコン

が収穫できるんや。だからデカなツの、はぜる音が聞こえるかもしれへんってゆー喩えや。秋のがデカくて上手いのとれるでな。春の経験があるお前ならできる、きばるでー!!」

「おー!!」と青一郎が素直に手を上げている。

やがて聞く気もなくなつて、今日も新聞を広げ出した波限であつたが、

「あのですね、なぎささん」

講義が終わつたのか、青一郎が話しかけてきたのでそちらに眼を向けた。

「おれ、考えたんですが……。やっぱり高校卒業したら、進学しようと思つてゐるんです」

「……」

波限は黙つて青一郎の眼を見た。少年は真面目にそれを見返して話を続けた。

「色々考えたんですが、もう少し勉強、したいです。源さんに会つて農業とか興味出てきたし、自給自足っていいじゃないですか」

新聞を広げた手を止めて、それを閉じることすらせず青年は少年の話を集中して聞いていた。

「専門学校か、大学の農学部かまだ考えてないんですけど……お金の問題もありますし。あ、おれ結構貯金あるんで、大丈夫ですよ。

なぎささんが食べさせてくれたから、かーちゃんの生命保険もまだたつぷりあるし。なぎささんが大学行つたのと同じやり方で行きますよ」

——どうやら人生設計はしっかりしてあるようである。

「……頑張れば」

波限はそう言つて珍しくふつと笑つと、新聞の続きを読み出した。その反応に青一郎は嬉しそうな笑顔を見せて言葉を続ける。

「それでおれが農業学べば、もっと色々作れるようになるし、なぎささんが職に困つたり、介護が必要になるような年齢になったら、ちゃんとご家族にも大根以外の食べ物届けてあげますからねー」

「介護つて、どんだけ先の話してんだ！……つて十しか変わんねえだろーが！」
と、思わず突っ込んでしまうものの——彼はその言葉からあることに気が付く。

血も繋がらない男同士の二人なのだ。もう一年半もすれば青一郎は自立し、波限も持てるならば家族を持ち、それぞれに勝手に生きていくことになるのだが、……なんのことはない。

離れても、血も繋がっていないのに、どうやら少年の方は「家族」でいる気らしい。

——まあ、そういうのもアリかもしれないな。
と片方は無愛想に片方はにこにこ笑っている、友達でも兄弟でもない、いつもどおりの不思議な関係の二人であつたが、これから何かが変わっていくのかもしれないし、変わらないものもあるのかもしれないな、ということを感じていた。

そんな話をする二人に向けて、突然源助がぼつりと呟く。

「農学部かー。ええなー、ワシも行きたいなー」

「いいじゃないですか、行きましようよ」

「ほんまか？　ほんとに一緒に行ってもええんか！？」

相変わらずとぼけた二人で盛り上がり始め、「いや、やめとけ」と波限は心の中で思っていたが、そのまま青一郎に恩返しをしたいととり憑いてくれないか——などと「家族」と認めた割には酷いことを考え始めていたのだが、

「ベンキョーしたことはちやあんと、聖護院とはつか嬢とその子供らに還元するでな！　ワシになんかあつても、ちやあんとワシと清白様との子供らがこのご恩、果たすでな！　美味いダイコン、一生食おうな！！」

「アホか！！」

しかし結局彼の背中に戻ってきては、気の早いことを言ってくるマ

イペー
スな大根に、波限は今宵も怒鳴ることになるのであった……。

恋をしています（５）〈最終話〉

さて、さらにそれから数日後のこと……。八月の休日の昼下がりに、波限は裏の畑でひとり、柄杓で水を撒いていた。ここ最近では雨が降っていないため、この真夏の青空の下、水をやらねば折角実をつけたナスやトマトが枯れてしまうのだ。

源助の言うとおり、今や元々彼に強制されたからというのは関係なく、自分が手を掛けた植物と言うのは元々田舎育ちだからか、波限も妙に愛着が湧いてきていた。

端から見ればなんとも侘しい孤独なサラリーマンの図であるが、何を考えているのか分からない人間よりも、手を掛けただけ答えてくれる植物の方が口下手な彼には似合っているようだった。大根以外の野菜もこちらもしっかり収穫が出来、聖護院家の食卓に彩を添えている。

真っ赤なトマトを手に取り、ふと隣の佳人にでもあげたら喜ぶだろうか——と先日話した時の感じの良さそうな笑顔を思い返す波限。我に返り、何を調子こいてるんだ俺は、とぶんぶん首を振ってもぎ立てのトマトに噛り付いた。店で売っているものよりも、断然甘かった。——うん、よい出来栄えた。

そんなことを考えながら、真夏の太陽にじりじりと照らされた波限が、食べ終わったトマトの芯を放ると——、

「こんにちは……」

夏の太陽よりもなお眩しいその笑顔——。隣人の初夏嬢が、畑にしゃがんでいる彼を覗き込んでいるではないか。

——夢か現か幻か！？？

波限は愕然としたが、如何せん、無表情なところがあるので、その驚きの分だけ顔が強張ってしまい、恐ろしいほどの仏頂面になってしまっていた。

……やっぱり好かれてるって嘘かなー。

初夏は青年の恐い表情にたじろぎそうそうにもなるが、顔は恐くともどことなく暖かい雰囲気があることは感じていたし、折角あれをきっかけに話が出来そうだったので、もう後悔はしたくないと勇気を出してみることにしたのであった。

「大家さんのところに、友達との旅行のおみやげ持っていていったんです」

初夏はそう言って少し笑った。

本当は波限がひとりで畑に居るのを見つけてタイミングを合わせたのだが、あからさまなのも迷惑かと思い、言い訳のようにそう言ったのだった。

波限は波限で、彼女に会う時はほとんどいつもＴシャツにジャージ姿に頭にタオルというダサい畑仕事仕様であることに、どこか情けない気分になっていた。

「……この前は、すみませんでした」

少しの間の後に、波限の方から立ち上がりながらぼそりと言った。それは改めて謝りたかったほど、本当に悪いと思っていたことであつたし、初夏が自分に文句を言いに来たのかもしれないと思つたのもあつた。

「え？ いえいえいえ、全然！」

逆にそんなこと思つてもいなかった初夏の方が驚いてしまい、背の高い青年を見上げながら首を振った。寧ろこの青年が、自分のことを未だに気に掛けてくれたことの方が嬉しかった。それに――

「喋る大根さんなんて、素敵ですね。そんなことあるんだなんて、面白かったし嬉しかったし、ラッキーだなあつて思ってます。できたらまた大根さんと、お話したいくらい」

「――！？」

――はいいいい！？？？

波限は思わず耳を疑い、初夏を凝視してしまった。彼女はにこに

こと綺麗に笑ったままであった。

「よかったら、また、いつでも遊びに来てくださいって、大根さんに伝えておいてください!」

……のあんだってええ!??

予想もしなかった事態に波限は夏の炎天下の下、熱中症ではないかと思うほどくらくらししてきた。

……ここにきて……まさか、まさか……、大根がライバルになるとはーっ!??

がーんという音が聞こえてきそうなほどの波限の動揺と驚愕は、彼の無表情が幸いにして初夏に知られることはなかったが、初夏としてはこっそりとこんなことを考えていたのであった。

——童話のようなことが本当にあるんだなあと、夢見がちな彼女はこの信じられない事態を喜んでいたし、折角だからもつとあの不思議な大根と仲良くなりたいたいと思っていたのも本当であった。

しかし先に大根から仲良くなれば、この無愛想な青年とも少しは仲良くなれるかなあという、女としての少し狡い計算もあったのことだった。そんな自分が彼女は少し嫌になるものの、あんな不思議な喋る大根に好かれているこの青年に、前以上に興味を示すようになったのも事実である。

「……わ……っかかりました、伝えておきます……」

複雑な感情の中、それでもあんなクソ大根であっても彼女と仲良く出来るきつかけになればそれはそれで嬉しい、というかあの大根の存在を知られながらも、奇人変人扱いされないだけ物凄く幸運なことである——と波限は思い、初夏の言葉に頷いた。

そしてそんな初夏を、可愛いが少し変わった女性だと思う反面、前の彼女と最終的に合わなくなった理由であろう、実直さ以外で「一般的なよくある価値観」で物事をはかられることが——おそらくは自分の育ってきた環境が特殊だからか、波限は密かに苦手であったので、そうではなさそうな初夏には外見だけでない好感を改めて抱き始めていた。

「それじゃあ、畑仕事、頑張ってください」

本当はもつと彼と話をしたかったが、この青年の様子からしてお喋りな女は好きではないんじゃないかと察せられたのと、やはりどこか気恥ずかしかったので、初夏は早々に立ち去ろうとした——が、意外にも青年の方から呼び止められ、少々どきりとした。

「また、何か採れたら要りますか？」

相変わらず初夏の方は見ておらず、ナスやトマトの方を見ているという無愛想な態度であるものの、その言葉は自分に何かしてくれる意思表示であり、それは彼女にとって胸がときめくほど嬉しかった。

「えっと……でも折角作られたものですし……」

しかも高校生の食べ盛りを養い、家計の足しにしているかもしれないし、自分が何もしていないのにタダで貰うのも申し訳ないと思い初夏は一旦は遠慮した。

だが善意を無にして、相手にがっかりされるのもまた嫌で——、「でももし、いただけるようでしたら……お礼にお菓子でも作ってもってきますね」

これは名案、と思いつくと、初夏は照れたように笑ってそう言った。

……うっわー……。てづくりおかしくて……。てづくりおかしくて

……、なにこの、一昔前の高校生の純愛みたいな展開はっ！！

再び波限の頭からつま先までがくらくらと揺れてきた。熱中症にでもなってしまっただろうか。

期待しないことには慣れている波限であるが、本当はそれほど強い人間でもないの、調子に乗ってしまいそうになるではないか。顔が赤いのはきつと、仮病でも熱中症として誤魔化せるだろうと、髪の前まで熱く感じられるほど朦朧とした意識の中で、青年はぼんやりと考えていた。

そしてここで終わっておけばいいものの、もう一押し——などと

「いいやらしい意味ではなく、本当に純粹に、先日的一件からずつと心配していたことを波限はついでに口にした。」

「あと、お節介かもしれませんが、」

「？」

初夏は歩き出そうとした足を止めた。

「この前みたいに——なんか恐いこととか、困ったことあったら、声、掛けてください」

「……」

これはまあ……この前の、のーぶらだったり夜中にうつかりドアを開けたり、どこか抜けていそうで無防備な初夏のこと、女性の一人暮らしで何か犯罪に巻き込まれてもいけないと大事な彼女を心配してのことだったが、それこそ逆に変に警戒されてもいけないと思い、波限は畑の草を取りながら、なんてことないように呟いていた。「夜なら俺か、青一郎か、どっちかはいると思いますし。昼間でもあのクソ大根でよければ……。まあ、彼氏……さんのいるよーな時は要らんと思いますけど」

そして七十五パーセントの善意と二十パーセントの下心と、五パーセントの鎌掛けの意味で、そう言った青年の言葉に——、

「そ、そんなのいませんよ」

——まさかの奇跡の大逆転！！ 恥ずかしそうな初夏の返答が、期待したとおりに返ってくるではないか！

自分のセクハラ交じりの問いかけの仕方が自分でも嫌になりつつも、思わず心の中では喜びに小躍りしつつも——無表情の中で波限は、あー俺って本っ当ーにやらしーなー、いつそのまま本当に熱中症で倒れてしまえ、という気分になっていた。

「だから、嬉しいです……。ありがとうございます」

しかもぼつりと呟かれた初夏の声に、彼は思わずぽかんと彼女を見上げてしまった。

恥ずかしそうに、しかし心から嬉しそうに微笑むその顔に、癒されるどころか今度はこの暑さに鼻血でも出そうな勢いになり、柄杓

の水を頭からかぶりたい気分になってきた。彼女が見ている前で、そんな奇行が出来る訳もないが。

その言葉を最後に、初夏は背を向けてぎこちなく歩き出した。その心は、恥ずかしさにドキドキとしていた。

——帰ったらとりあえずお水でも飲もう。喉がからからしてしまっている。

本当はついでに、「おにーさんには、彼女いるんですか？」といつか見たあの綺麗な女性のことが気になるので聞きたかったけれど、そこまで聞くのはあまりにあからさまな気がして——、今日はやめた。

前よりも仲良くなれそうな予感がするから、きつとまた、聞ける時もあるだろうと信じて。

とりあえずの進展に、初夏は思わずにんまりしてしまいながら、誰かにこんな変な顔を見られてないかときよるきよる確認すると、慌てて家へと向かった。

……その小さい背中を見送りながら、波限はとりあえずナスとトマトに悪いと思いながらも——、バケツの水を頭から被った（ちなみに汲みたての水道水である）。

がんと乾いた地面に空のバケツを置き、その上にそのまま置いた両腕にぼたぼたと滴る水も構わず、大きな息をつきながら緩みそうになる頬を引き締めるように、茶色い地面を睨み付ける。

真夏の太陽に照り付けられ、更には脳みそまで沸騰していた身体に流した水は心地よかった——けれど、そんなものは表面的な熱の沈静に過ぎなかった。

——やべーよな、やべーって、やべーよ。

何がやばいのか、彼自身にも分からないが、もうこうなってしまった以上、後戻りは出来なさそうだった。

そして、ふと嫌な予感がして波限が顔を上げると……いつの間に

帰宅していたのか、かわいい顔した男子高校生と喋る大根が二人、彼の部屋のベランダから、じーっとこちらの様子を伺っていた。

二人とも必死で笑いたいのを堪えているように肩を震わせ、口の形だけで「ひゅーひゅー」と言っているのが、水の滴る眼鏡越しの眼でも分かった――。

波限は何も言わずに、手元にあつた柄杓をその二人に向かって思い切り投げつけた。

けたたましい音と賑やかな悲鳴が隣の部屋からまた聞こえ、「何の音かな？ やっぱりお隣は楽しそうだなあ」と自分の部屋の真ん中で、冷たいお茶を手に火照る顔を冷やしていた初夏は呑気に思っていた。

・・・・・・・・・・

――さてさて、この先どうなりますやら。

刺身のつまにもなりやしねえお話は、とりあえずこれにておしまいとさせていただきます。

く了く

恋をしています（5）《最終話》（後書き）

いやはや、おあついラストでした…。実はこのお話は「お題に沿って何か書いてみよう」と決めサブタイトルをお友達に作ってもらい、書いてみたものです。いただいたサブタイトルが5つだったので、最初から5話におさめること、そしてサブタイトルにちなんだ展開にすること、を目標にしていたのでここで終わりにしました。ちなみに喋る大根というネタやリーマンの片思いネタはサブタイを考えてくださった方の発案ではなく、私個人の思い付きです。5つのキーワードを見ていたら、何故かこのようなお話が浮かんできました。

あとこのお話は昨今よくあるどろどろした恋愛じゃなくて、一昔前かと思うほどの大人なのにびっくりするほどのぴゅあぴゅあ恋愛を書きたくてこうなりました。

それから余談ですが、キャラの名前は主人公の名前以外は大根の種類からもじってあります（主人公の名前は某古典文学からとってあります）。

そしてそして……このお話のイメージぶち壊してもよろしければ、主役CP中心のR18な、らぶえっちものな内容でもよろしければ（滝汗）、密かに続編などもありますので、よろしければ各ページからリンクしてある個人サイトの方へお越しくださいませ（内容上、続編タイトルやリンクは本編からは差し控えていただきます）。ほんとまるで別の作品のようにらぶらぶ甘甘で、しょっぱなからR18展開ですのでどうかそういうものでもOKな方のみお読みいただきますようお願いします。（どうしてそういうものを書いたかと言うと、このお話の裏テーマとしてそういうった人間の求めるものみたいなのも含んでいたのです。）

それではこれにて。このお話を最後まで読んでくださった皆様、誠に誠にありがとうございます！

もしものもしもでコメントいただけます場合は、拍手メッセ（非公開／ブログでお返事）、または作品最終ページの感想欄（公開／感想欄でお返事）をご利用くださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2124d/>

刺身のつまにもなりやしねえ。

2011年11月5日03時25分発行